

日本のひきこもり概念の変遷と支援の現状
-NPO法人「T会」の取り組みを参考に-

環境情報学部4年 白鳥 健

71044412(t10441ts)

概要

本稿は、日本の青年の社会心理的問題としての「ひきこもり」現象の定義の曖昧性を巡って、複数の分析を試みるものである。曖昧な定義の形成過程と、その扱い方の検討、曖昧な定義の影響がみられる支援の現状について、順を追って分析した。「ひきこもり」は当事者、時には関係者双方に苦悩や絶望感をもたらす現象であり、「ひきこもり」が長期化するほど解決はより困難になる。その背景には経済的・文化的・社会的問題など、当事者・関係者の力では解決し難い問題が潜んでいることも多い。ゆえに本稿では、一つの試みとして、第二章で、データマイニングの手法で統計分析を行い、その結果を解釈するアプローチをとった。

本論第一章では、ひきこもり現象の時代的変遷を追う。いま語られている「ひきこもり」に近い現象は、少なくとも70年代から確認されている。これらの現象から「ひきこもり」現象は、どう抽出・記録されてきたのか、その現代に至る概念の分化の過程に迫るのが本章である。また、ひきこもりを題材とした都市伝説や映像作品を紹介し、ひきこもりに対する偏見の現状についても触れた。

第二章では、冒頭で、ひきこもり現象と統計分析の関係を概観した。次に、用意したデータへ統計分析を施し、その結果を解釈した。そして、本稿の解釈と、他の3つの調査の解釈とを比較し、考察を加えた。

第三章では、筆者のフィールドワークとしての「T会」におけるボランティア体験に基づく知見を、整理した。当事者のライフストーリーを4件ほど紹介し、支援の現状について概括的に言及した。

結論部では、冒頭で、三章における「T会」の事例と、秋田県藤里町の事例を、比較した後、それぞれの章の知見から、一つの結論を導いた。また、本稿で触れることのできなかった課題について言及し、結びとした。

目次

第一部：序論

- 1-1 研究背景
- 1-2 先行研究
- 1-3 研究目的
- 1-4 研究対象
- 1-5 研究手法

第二部：本論

第1章 「ひきこもり」現象の時代的変遷

- 2-1-1 1970年代～90年代
- 2-1-2 2000年代～現在
- 2-1-3 1章のまとめ

第2章 「ひきこもり」現象と統計的分析

- 2-2-1 「ひきこもり」と統計分析の関係
- 2-2-2 分析結果
- 2-2-3 2章のまとめ

第3章 「ひきこもり」支援の現状と展望

- 2-3-1 NPO法人「T会」の概要
- 2-3-2 カフェでのボランティア体験
- 2-3-3 地域ユースプラザでのボランティア体験
- 2-3-4 3章のまとめ

第三部：結論

- 3-1 秋田県藤里町の事例とT会の事例の比較
- 3-2 結論 「中間的就労」の可能性と問題点を巡って

謝辞

参考文献

付録

第一部：序論

1-1 研究背景

日本の青年の社会心理的問題としての「ひきこもり」現象は、小中学生の時期から人間関係に不自由を感じ不登校からひきこもりへと移行したケース、あるいは、高校や大学の卒業後、定職に就かずに、自室にひきこもり、親に経済的に依存した生活を送りつつも、社会的な活動からは身を引くケースなど、その様相は千差万別である。中には、誰とも会話をせず、自分の部屋で毎日を過ごし、親が用意した食べ物を部屋にこもって一人で食べるという暮らしを送っている者もいる。一方で、家族などの身近な人間とは会話をし、夜中にコンビニエンスストアに出かけるなどといった軽度の外出を行う者など、「ひきこもり」の度合いは様々である。しかし、彼らのすべては、年齢に相応の社会的な活動をしておらず、働かないことに加え、就職活動にボランティア活動、さらに友人との交流や余暇を楽しむこともせず、しばしば対人関係のきっかけから自ら身を引いてしまうことがある。彼らは傍目には怠惰にみられることが多いが、決してそうとは限らない。頭の中では仕事をしたいと考え、またそうすべきだと自覚している。インタビュー等を通して、客観的に、自分の人生の経緯を簡潔に説明できる者もいる。彼らは自宅にひきこもりながら、働けない自分について苦悩し、葛藤している。しかし、何らかの行動を起こすことができず、そのまま幾年にも渡り、自室で虚しく時を過ごすのである。¹このような現状を受けて、われわれはこの問題とどう向き合うべきなのだろうか。ひきこもりの研究者であり精神科医の斎藤環は次のように述べている。

ひきこもり支援の難しさは、それが広い意味で「生き方」の問題に結びついてしまうためです。「病気」の問題ならともかく、「生き方」の問題には治療だけでは対処できません。教育、カウンセリング、哲学、経済学など、学際的な協力が必要になります。（斎藤環、『ひきこもりのライフプラン』岩波ブックレットNo. 838:2頁）

こうした「ひきこもり」の存在は1990年代にはすでに知られており、一部では注目された現象になりつつあった。本論第1章に後述するが、「ひきこもり」現象の、確たる発生時期は明らかではない。70年代から「若者の無気力化」が問題視されるようになり、80年代には「スチューデント・アパシー」の用語で「無気力な学生」の在り方が議論されるようになった²。その後、90年代後半から以下の3つの「ひきこもり」の関連事件が発端となり、「ひきこもり」への関心

¹ 井出草平 (2007) 『ひきこもりの社会学』世界思想社:2-5 頁

² 石川良子(2007) 『ひきこもりの<ゴール>』青弓社:48 頁

が増加したと説明される。1999年の京都日野小学校男児殺害事件（以下、京都事件）、2000年の新潟県柏崎市女性監禁事件（以下、新潟事件）・佐賀西鉄バス乗っ取り事件（以下、佐賀事件）は、いずれも「ひきこもり」当事者によって実行され、これを契機に1999年から2000年にかけて、ひきこもり関連記事・書籍が大きく増加した³。内容は、「ひきこもり」の様態に対して否定的な見方を示していたものが多くあった。例えば、読売新聞は「新潟事件」の容疑者について、精神科医のコメントを引用し「極度な引きこもり」と表現した⁴。「京都事件」容疑者が任意同行を拒み飛び降り自殺し、「新潟事件」容疑者が逮捕されると、読売・毎日・産経の各紙は2つの事件の背景に「ひきこもりがあった」という識者コメントを掲載した⁵。各紙は「他者との人間関係がうまく結べない若者による犯行」という括りでこれらの事件を捉え、コメントの中には、父親の不存在と母子密着が著しい家庭が背後にあったと報じたものもあった。一方、非社会的行為である「ひきこもり」と反社会的行為である「犯罪行為」には直接的な因果関係はないとする論⁶や、事件を起こしたのが偶然ひきこもりだったと主張する確率論⁷なども存在した。犯罪リスクとしての「ひきこもり」という指摘はこれ以降に登場する。

近年のひきこもりへの言及で、独特のものとしては、オカルト作家で妖怪研究家の山口敏太郎の、2010年8月10日のustream配信で中継された「第9回巨不登校・ひきこもり・ニートを考える放送局1部；狂気と普通の境界線」にて、「ひきこもり・ニートは現代の妖怪になりうるのか？」という問いに対し、「なりうる」とコメントしたことが記憶に新しい⁸。その裏付けとして、都市伝説の「ヒキコさん」という、学級崩壊していたクラスでいじめの被害に合い亡くなった子どもが、いじめっ子を地面に引きずりながら、肉塊になるまで引きずって殺すという凄惨な物語を取り上げている。学級崩壊の問題化が時代的にそれほど顕著でなくなった後、「ひきこさん」には名字がついて「森妃姫子」つまり「ヒキコモリ」となり、ひきこもりの幽霊となったというが、この都市伝説はインターネット上でも未だ語り継がれている⁹ことから、ひきこもりに対する一定の偏見ないし負のイメージが、現在にも継続して存在しているといえる。

「ひきこさん」の都市伝説が題材となった映像作品に、『ひきこさん』（2008）『真・ひきこさ

³ 工藤宏司(2008)『ゆれ動く「ひきこもり」』『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』ミネルヴァ書房:48頁

⁴ 読売新聞 2001.2.1「三条の女子殺人事件」

⁵ 読売新聞 2000.2.11「監禁・殺人…異常事件続発の背景」、毎日新聞 2000.2.12「なぜ『若者』は凶行に走ったのか」、産経新聞 2000.2.11「社会と断絶『ひきこもり』昼夜逆転」

⁶ 斎藤環(2000)『精神科医から見たひきこもり』ロゼッタストーン:33頁

⁷ 藤田富士也(2000)『誤解だらけ!? [ひきこもり]の真実』週間SPA:22頁

⁸ 巨椋修(2010)『巨椋修（おぐらおさむ）の不登校・ひきこもり・ニートを考える FHN 放送局』<<http://d.hatena.ne.jp/fhn/20100810>> (2013/12/21 取得)

⁹ (2003)<http://www5d.biglobe.ne.jp/~DD2/Rumor/column/hikiko_san.htm>(2013/12/21 取得)など、作者不詳の文章しか見当たらないが、インターネット上の検索エンジンでキーワードを入力すると、さまざまなホームページと映像作品がヒットする。

ん』(2009)『エクスリベンジャーズ ひきこさん ミ・ナ・ゴ・ロ・シ』(2010)『ひきこさんVS口裂け女』(2011)『ひきこさんVSこっくりさん』(2012)などがある。

このように、論者の立場によってひきこもりのイメージが変容するといっても過言ではない状況で、ひきこもりの妥当な定義は存在し得るのだろうか。ひきこもりは推計69.7万人¹⁰とも100万人¹¹ともいわれるが、論者によって数値に違いが生じているのは、ひきこもりの定義が何よりも確定し難く、曖昧性を孕んでいる証拠であろう。私自身は「ひきこもり」の経験がなく、親族にも経験者はいない。ただ、当事者の語りに共感する部分もあれば、理解の及ばない事柄もあり、臨床家の寺戸順司は「ひきこもり」現象を前に「どこか勝ち目のないゲームに引き込まれたというような」感覚をもつと表現し¹²、私もそれに共感した。

1-2 先行研究

本論第1章に関連する先行研究として、石川良子(2007)の著書『ひきこもりの<ゴール>』における第2章『「ひきこもり」の社会的文脈』を紹介する。本章は、80年代の「若者の無気力化」についての言及から、「ひきこもり」に関する新聞記事の増加が1999年~2000年にかけて顕著であることを、折れ線グラフで図示している。また、関連書籍は2000年~2001年にかけて増加していることを棒グラフで示し、2000年を分水嶺としてひきこもりへの社会的関心が高まり、その背景に、前述の3事件(京都事件・新潟事件・佐賀事件)が関連していると分析している¹³。2004年以降は同グラフにより、「ひきこもり」への加熱化した議論が収束の方向へ向かっているとの見方を示している。これに関し、石川は「『ニート』がにわかに注目を集め、そちらのほうへ世間の関心移ったためではないかと考えられる」と述べている。また、鈴木(2012)による論文『日本のひきこもり,ヨーロッパのひきこもり -イタリアとフランスの現状に触れて-』においては、「日本で『ひきこもり』への関心が高まったのは1990年ころ」とし、「10年から15年ほど遅れて」ヨーロッパでも関心が高まったと報告している¹⁴。この間に世界でインターネットが急速に普及していることから、フランスなどでは「ひきこもり」現象を「インターネット依存」の結果と捉える者も多いが、鈴木らは日本での現象の蔓延に鑑み「インターネット依存はひきこもり現象の原因というよりもむしろ結果」との見方を示している。イタリアでは、2009

¹⁰ 内閣府(2010)『若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)』

¹¹ 斎藤環(2003)『ひきこもり文化論』紀伊国屋書店:37頁

¹² 寺戸順司(2010)『「ひきこもり」~「不可能世界」に生きる人たち』<<http://www.osaka-counseling.com/menu11/>>(2013/12/21 取得)

¹³ 前掲『ひきこもりの<ゴール>』45頁

¹⁴ 鈴木國文(2012)第107回日本精神神経学会学術総会『日本のひきこもり,ヨーロッパのひきこもり -イタリアとフランスの現状に触れて-』精神誌:40頁

年2月11日に有力紙『il Corriere Della Sera』が「ひきこもり」特集記事を組み「50の事例を把握した」。2010年の精神病理学雑誌『Giornale Italiano di psicopatologia』でのイタリア人の論文では、「ほとんどが日本の『ひきこもり』現象の紹介で、イタリアでの『ひきこもり』についての情報はない」と述べた。

第2章に関する先行研究は、第一に、工藤・川北(2008)による『「ひきこもり」と統計-問題の定義と数値をめぐる論争-』が挙げられる。ひきこもりの総数が「推計」で語られてきた事実言及し、実態としては「ひきこもり」でありながら、その存在を確認できず数え漏らされた人々における「暗数」の問題を指摘する。また定義問題を巡って、「『ひきこもり』についてはこれまで各所で多様な定義が提示され、一致したものが存在しない」ために「複数の『ひきこもり』定義を検討」し「『包括的定義』を作成すればこの問題はクリアできるはずだ」と述べる。ジョエル・ベストの「定義の誤分類」の概念にも触れ、「正・負の誤分類」が存することを念頭におき「妥当性の高い定義」に近づけることが定義づけのポイントだと説き、結論では、三宅由子のひきこもりの疫学調査に言及し「『妥当性の高い定義』とは『何を把握したいか』という調査者の意図との関連でしか決定しえない」と述べている¹⁵。また、荻野達史(2008)の『「ひきこもり」と対人関係-友人をめぐる困難とその意味-』では、「友人」の概念に着目し、「ひきこもり」の分析においては「コミュニケーションの取り方や対人関係のあり方が大きく変化してしまったと考え、そのことをより重視することも可能」と述べる¹⁶。そして、荻野は次に半構造化インタビューのスキプトの一部を紹介し、4つの仮説¹⁷を示した上で、諸仮説の検討を行っている。その結果、50人ほどの質的データで、3分の1近くの人、少なくとも在学時までの対人関係には特に問題があったとは語っておらず、「ひきこもり」者がすなわち「対人関係に難がある人」では必ずしもないことを確認した¹⁸。

第3章に関する先行研究には、中村・堀口(2008)の『訪問・居場所・就労支援-「ひきこもり」経験者への支援方法-』を挙げる。中村らは2003年夏～2004年夏にかけて、関東の支援団体を中心に、主に参与観察による調査をおこなった。民間支援団体の形態を、訪問活動、居場所運営、

¹⁵ 工藤宏司・川北稔(2008)『「ひきこもり」と統計』前掲『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』:77-80頁

¹⁶ 荻野達史(2008)『「ひきこもり」と対人関係-友人をめぐる困難とその意味-』前掲『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』:130頁

¹⁷ 1,葛藤も含んだ関係を営んでいく耐性やスキルに欠けるがゆえに引きこもる。2,完全に理解される関係を期待するがゆえに引きこもる。3,共振的・表層的關係が主流になっている時代において、「ひきこもり」者はより深い「理解」を求めるタイプであるがゆえに、かかわりから撤退する。4,若者たちのコミュニケーションは、相互に傷つけないよう、過剰な配慮に満ちあふれており、その精神的重圧が「ひきこもり」者にとっては対人関係に参加する上で「高い敷居」になる。

¹⁸ 脚注16番と同書:155頁

就労支援、親への対応の計4点に分類し、すべての団体がこの4点を備えているわけではないと述べている¹⁹。

1-3 研究目的

本稿の目的は、「ひきこもり」の定義の曖昧性を巡って、多角的な分析を試み、現象の理解を促すことである。一般に、複数の人間がある対象に関して議論する際には、対象の操作的定義が当事者間で共有されている必要がある。例えば、しばしばひきこもりの議論に関連する「ニート」に関しては、日本では厚生労働省により「15歳~34歳の非労働力人口の中から学生と専業主婦を除き、求職活動に至っていないもの」と定義される²⁰。「ひきこもり」もこの「ニート」の定義の要件を満たしている場合があるが、両概念は区別されるのが一般的であろう。「不登校」は学校に登校しない状態を指し²¹、実質的な状態に「ひきこもり」との類似性がみられるが、両者は現在では区別される。「ひきこもり」に関しては、厚生労働省が「『仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6ヶ月以上続けて自宅にひきこもっている状態』時々買い物などで外出することもある場合も『ひきこもり』に含める」とあるが、たとえばフリースペース等に通うことのできる当事者と、自室からまったく出られない当事者との間には、かなり状態の異なる様相を示している点が指摘でき、また6ヶ月という期間の区切りも、その数値の根拠が不明である等、「ひきこもり」を包括的かつ曖昧に定義することで議論を遅滞させる可能性が指摘できる。また、二章で詳しく検討するように、定義を明確にできない理由も存在する。そして、ひきこもりの定義が曖昧である以上、ひきこもりの支援手法も支援団体によってかなりの変容がみられる可能性が示唆される。このような変容の是非を問うわけではないが、当事者の必要とする支援に自宅からアクセスできず、遠隔地でしか同等の支援を受けられない場合がしばしばあり、さらには中村・堀口(2008)の指摘するように地域によっては支援団体の存在しない市区町村もある等、支援の効率性の観点から現在の支援体制の欠点を指摘することができる。

本稿では、まず「ひきこもり」の語りの時代背景を分析し、おおよその現代的文脈を同定することを試みた。また、刊行書籍から半構造化インタビューのデータを抽出し、非線形回帰分析を施した。フィールドワーク調査では、一つのNPO法人への接触を行ない、現状について調査した。

¹⁹ 中村好孝・堀口佐知子(2008)『訪問・居場所・支援 - 「ひきこもり」経験者への支援方法-』前掲『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』:187頁

²⁰ 総務省(2010)『労働力調査』

²¹ 文部科学省『平成24年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』

1-4 研究対象

本稿の研究対象は、2つに大別して「ひきこもりに関する文献・資料」と「フィールドワーク先の『T会』の情報および職員・当事者に対する観察・対話」から構成されている。前者は、刊行書籍・インターネット上の映像・画像・ホームページ上の記述やファイル、論文資料等、本稿作成に必要なものを参照・引用した。後者は、神奈川県主催の『平成25年 ひきこもり・不登校の子ども・若者を支援するボランティア研修』の研修先として紹介された『T会』にボランティアスタッフとして従事した筆者の体験が基となっている。また、第二章におけるデータの出典は次の通りである。塩倉裕『引きこもる若者たち』（塩倉, 1999）, 塩倉裕『引きこもり』（塩倉, 2000）, 田辺裕『私がひきこもった理由』（田辺ほか, 2000）, 上山和樹『「ひきこもり」だった僕から』（上山, 2001）, 勝山実『ひきこもりカレンダー』（勝山, 2001）, 諸星ノア『ひきこもりセキララ』（諸星, 2003）, 斎藤環監修, NHK「ひきこもりサポートキャンペーン」プロジェクト編『hikikomori@NHK ひきこもり』（斎藤環監修, 2004）, 萩野達史『「ひきこもり」と対人関係』（萩野, 2008）。

1-5 研究手法

第一章では、ひきこもりの概念の変遷に関する文献調査を行ない、筆者の考察を加えた。第二章では、ひきこもり現象の統計分析に関する文献調査に加え、48件の半構造化インタビューのデータに対し、R言語による非線形回帰分析を行った。その際に出力されたモデルを参照し、分析結果を解釈した。第三章では、ひきこもり支援の現状に関する文献資料の調査と、NPO法人に対するフィールドワーク調査を行ない、考察を加えた。

第2部:本論

第一章：「ひきこもり」現象の時代的変遷

本章では、70年代の「若者の無気力化」から、現代の「ひきこもり」現象への分化の様相を簡潔に述べる。大きく社会問題化した2000年を分水嶺として、項を分けてある。

2-1-1 70年代~90年代 「若者の無気力化」から「ひきこもり」概念の到来まで

60~70年代は大学生を中心とした学生運動が盛んであった。その、既存の体制を打破するためのエネルギーは、80年代になると日本経済の安定に伴い、「校内暴力」という形に分化した。1980年代後半になると、このエネルギーは更に内向し「いじめ」「家庭内暴力」という形に発展する²²。これらの行動の変化と平行して、「不登校」「ひきこもり」といった問題が増え、青年の無気力・意欲の低下が「スチューデント・アパシー」などの用語で注目される。こうした不登校の生活様態が把握される中で明らかとなったのは、不登校の子どもの一部がずっと家の中にこもり続けている「不登校の様式としてのひきこもり」と、不登校のまま高校年齢を終えた子らが社会に出ないままこもり続ける「不登校の結果としてのひきこもり」の2つの像である²³。

前者の像は、80年代では「閉じこもり」と呼ばれ「不登校」の実態として扱われていた。70年代に我が子が不登校となった研究者の奥地圭子は、70~80年代には、「登校拒否を考えることは閉じこもり」を考えることだったと述べている²⁴。これに関し、石川(2007)は、「いまよりも不登校に対する世間のまなざしは格段に厳しく、それゆえ子どもたちは閉じこもらざるを得なかった」と分析する。80年代後半になると、奥地圭子らによるフリースクール運動がさかんになり、「不登校の様式としてのひきこもり」に対しては支援の手が届くようになる。なお、80年代以前には「不登校」は病気とみなされ、治療・矯正の対象だった。89年に始まった学校不適応対策調査研究協力社会議に「不登校には学校教育の在り方が関わっており、ゆえにどの子にも起こりうる」との認識が示されたのは、奥地らの「不登校運動」が発端となっている。ひきこもりに対して「見守る」「待つ」といった姿勢の大切さが謳われ始めたのは、この時期であった。

後者の像に、工藤定次は「打ち捨てられ」てゆく「自らは動けないタイプの不登校児」を当てはめ、これを「ひきこもり」とし、これらの子どもには独自の対応が必要であることをアピールした²⁵。工藤(2005)はこれに関して「『こいつら』は打ち捨てられていくと思った。」と述べている。軽度の外出が可能な不登校児への対応策だけが「主流」となり、外出できない不登校児が時代とともに蓄積してゆき、「どうしようもない時代が来るだろう」と「当時から思っていた」という。工藤の論では、「待つ」「見守る」といった姿勢は、自ら動ける子どもに対しては有効な姿勢たり得るが、「ひきこもり」に関しては「ひきこもっている間に知識や情報が不足」し、長期にわたると「考えても、考えても同じ結論にしか至らず、極めて苦しい作業」

²² 諏訪真美(2006)『今日の日本社会と「ひきこもり」現象』『医療福祉研究』第2号:24頁

²³ 石川良子(2007)前掲『ひきこもりの<ゴール>』:52-56頁

²⁴ 奥地圭子(2005)『不登校という生き方 -教育の多様化と子どもの権利』日本放送出版会:129頁

²⁵ 工藤定次・斎藤環(2001)『激論!ひきこもり』ポット出版:18-19頁

となり、やがて子どもは考える時間を放棄するようになると解釈する。すると、「待つ」「見守る」といった姿勢は、徒に時間を空費させることにつながるのである。

後の、斎藤環と工藤の議論で、斎藤は不登校への治療的介入の視点から、次のような見解を示している。「三十、四十代の息子や娘が、年老いた親たちの世話」になっている状況があるので、早期に周囲より「ひきこもることに対抗」する働きかけがあったほうが、結果的に彼らを支えることになる。不登校がひきこもりへ移行し、当事者が苦しんでいるならば、「治療」を勧める²⁶、と述べている。また、斎藤は別の議論で、ひきこもりのシステムティックな悪循環の構造を、「ひきこもりシステム」として、自著『社会的ひきこもり』(1998)で紹介している。このシステムでは、ひきこもり現象は、個人・家族・社会のシステムがそれぞれ接点を失うことで、外部からの力に個人が対応できずに、ストレスを溜め込んでしまい悪循環を導くとされる。これを鑑み斎藤は、「ひきこもり」に対しては「他者による積極的な介入」の必要性を主張する²⁷。

そして、90年代の末期に、多くの論者が指摘するように、「ひきこもり当事者」によって引き起こされた3つの事件が話題を呼ぶ。事件概要は省くが、京都日野小学校男児殺害事件（以下、京都事件）、2000年の新潟県柏崎市女性監禁事件（以下、新潟事件）・佐賀西鉄バス乗っ取り事件（以下、佐賀事件）が発生する。次項で検討するが、これらの事件により、「ひきこもり」概念は「不登校の変形」との見方に加え、「犯罪リスクを持つ存在」との見方も現れるようになる。

2-1-2 2000年代～現在 3事件の発生とひきこもりの社会問題化、就労支援の動き

京都事件、新潟事件、佐賀事件の容疑者は、いずれもひきこもり当事者であった。石川(2007)によると、「ひきこもり」の関連記事は、事件の前後で「朝日新聞」では約3.4倍(115件から393件)、「読売新聞」では約5.4倍(46件から248件)に急増しており、関連書籍は1999年に5冊刊行されたのに対し、2000年には15冊、2001年には36冊と増加した。当時の状況は、英国の社会学者スタンリー・コーエンの提唱した「モラル・パニック」の現象が起きていたといえる。この現象では、はじめに「『ひきこもり』は社会に対し悪影響がありそうだ」という認識が形成され、次第に「ひきこもり」に対する敵意が高まり、「ひきこもり」は「フォーク・デビル」として扱われる。次に「ひきこもり」と「われわれ」の明確な区分が形成され、「『ひきこもり』は社会に対する現実的な脅威である」という認識が広まり受容される。このとき、学識者

²⁶ 斎藤環・山下英三郎・藤井誠二(2001.9)『本当ですか!?「不登校の子はひきこもりする」』『月刊子ども論』クレヨンハウス:17頁

²⁷ 斎藤環(1998)『社会的ひきこもり 終わらない思春期』PHP新書:131-136頁

など専門家の発言力が高く、その一方で「フォーク・デビル」の声は社会へ届かず組織化もされていなかったことが「モラル・パニック」の特徴である²⁸。モラル・パニックを経て、各地で民間団体による支援活動や、親の会、専門家の議論などの活動が活発化した。2001年に、厚生労働省が全国の精神保健福祉センターと保健所に暫定的な「ひきこもり対応ガイドライン」を通達、2003年に決定版が出された²⁹。この間にメディアへ露出することの多かった斎藤環による活動などで、「犯罪リスクとしてのひきこもり」という「誤解」は次第に解消していった。ただし、2008年から2012年にかけて映像作品のモチーフとなった都市伝説の「ヒキコさん」などに見られるように、依然としてひきこもりへの犯罪のイメージをもつものも存在しているといえる。

ひきこもりへの公的な就労支援は、2003年の「ヤングジョブスポット」が横浜にオープンしたことから本格的に始まる。これは、大都市繁華街等において、フリーター等若年者が集まり、互いに就職相談や職業訓練などを行う場である。具体的には、「ヤング・ハローワーク」に敷居の高さを感じる者に「履歴書の書き方を教えること」や「適性のある職業を探す手伝い」などを行っていた³⁰。2003年より厚生労働省が設置を決定、独立行政法人雇用・能力開発機構が運営していた。当初、「アテンダント」とよばれる運営スタッフには、「ひきこもり」当事者が採用されており、彼らへの就労体験の意図があったことが推測される。ただし、2008年には「税金の無駄」とされ、「非効率」であることから廃止された。現在では、経済産業省の事業である「ジョブカフェ」が代替的な役割を果たしているが、支援対象が若年者（15歳～34歳）に限定されている問題や、2007年に高額な人件費が計上されていた問題などを抱えている³¹。

なお、「ひきこもり」の論じ方も、前出の2003年の厚生労働省の『10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保険活動のガイドライン』が示されたことに起因し、徐々に変化していった。以前まで精神分析や性格論的なアプローチが主流であったのに対し、このころから雇用支援や地域社会的なアプローチが増加するようになった。このことに関して、中村・堀口（2008）は、次のように述べている。

「ひきこもり」の社会問題化とともに、厚生労働省の『10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保険活動のガイドライン』（以下、ガイドライン）[厚生労働省, 2003]にもとづく公的支援が徐々に整備されてきた（……）「ひきこもり」のなかには、精神科におけるトラウマ的経験をもつ者や、精神的な病気というレッテル、あるいは「ひきこもり」を治療の

²⁸ Stanley Cohen, *Folk Devils and Moral Panics: The Creation of Mods and Rockers*, Routledge, 1972: p1

²⁹ 厚生労働省(2003)『十代・二十代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン』

³⁰ 石川良子(2007)前掲『ひきこもりの<ゴール>』:64頁

³¹ 小林美希(2008)「誰のための「再チャレンジ」だったのか -若者就労支援で儲けた人々」『世界』2008年10月号,岩波書店

対象とする考え方に対して嫌悪感を抱き、非医療的・反医療的支援の実践を目指す民間団体による支援に期待する声も大きい[勝山, 2001a; 諸星, 2003; 林, 2003]。 ([]は原文の出典を示す)³²

なお、中村と堀口の2人は、2003年夏から2004年夏にかけて、平均週3～5回のペースで、役割の定まらないボランティアとして関東の支援団体を中心に主に参与観察による調査を行っている。また、次のような論考も存在する。

医療社会学者の進藤は「医療化」批判の論点は、「病」と診断された者の脱主体化と「問題の個人化」との2点にあるとまとめている。(……)近年、「ひきこもり」状態にある、あるいはその経験のある人々に対する医療的診断をより速やかに実施し、その定義をより限定したかたちでおこなうべきだという社会的圧力が増している。(……)さて、「ひきこもり」の定義は『ガイドライン』に顕著だが(……)単なる「状態像」であることが強調される。(……)しかし、精神科医の倉本英彦は、「ひきこもり」が曖昧なままに流布している状況について、否定的に論じている。「精神障害というラベリングを受け入れたくないユーザーや家族の願望と結びつきやすく、「猫も杓子もひきこもりということになりかねない有様」だから、「定義を操作的な形で明確にしておくべきであると」[倉本, 2003:242]。(……)限定して明確化すべしという議論には、たしかに容易には否定できないところがある³³。

また、結論部で再考するが、2013年10月28日(月)に放送されたNHK『クローズアップ現代』は、秋田県藤里町のひきこもり支援の様相を映し、番組構成は「ひきこもり」当事者の雇用支援と地域社会とのかかわりに焦点をあて、町内113名のひきこもり当事者の大多数が自発的な意志によって支援の場へ向かう模様が示された。このように、最近のひきこもりへの論じ方ないしアプローチは、性格論などの精神医学的な内容のものよりも、雇用支援などに焦点をあてた地域社会学的な内容のものが相対的に増加傾向にあるといえる。

2013年においては、新たな動きとして、インターネット上で密かに話題となっている「ひきこもりビジネス」とカテゴライズされる取り組みが現象した。「ひきこもりビジネス」の特徴的な点は、当事者または経験者が提案した取り組みであることである。ジャーナリストの池上正樹らが着目する「中高年人材センター」は、50代のMという失業者の男性が牽引する団体で、「失業の原因追及から事業づくりまでNPO法人化によって目指す」というもので、5月末に発足

³²中村好孝・堀口佐知子(2008)前掲『訪問・居場所・支援 - 「ひきこもり」経験者への支援方法 -』:186-187頁

³³萩野達史(2008)『「ひきこもり」と精神医療-民間支援活動の示唆するもの-』前掲『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』213-214頁

した³⁴。また、「ひきこもり大学」は、授業料を寄付金箱への投げ銭方式で集め、当事者一人一人が「先生」となり自身の背景を語る「黒歴史学」などを開講する試みである³⁵。「NEET株式会社」は2013年12月現在、166名の若年無業者により構成され、いずれも株主の取締役であり、従業員は0名の資本金「1.05 百万円」の企業である。業務内容は「一切の事業」とあるなど、2013年4月発足の企業であるため、内実は現時点では不透明である。

また、石川(2007)は支援団体の経済的状況について「『ひきこもり』支援団体の最大の悩みは資金不足にあったが、『若者自立塾』の委託先になれば、公的助成を受けられるようになる」と述べるが、「若者自立塾」は、2009年に行われた事業仕分けによって、定員充足率の低さが指摘され、廃止された。2013年12月には、70歳の父親が44歳の息子を殺害する事件が広島県福山市で起きた。福山市は「予算がないのでサポステはできない」、市内の「ひきこもり」の推計については「福山市では、そこまでの調査はできていない」との見解を示した³⁶。このように、ひきこもり支援は、全国で一律に展開されているわけではなく、調査の手も、地域間格差が激しいといえる。そして、支援団体間でも、支援手法の違いがみられる。以上のことから、ひきこもり支援事業は、相変わらず厳しい経済的状況にあるといえるだろう。

2-1-3 1章のまとめ

本章では、ひきこもりの社会的な概念の成り立ちと、その支援の様子の時代的変遷についての概略を述べた。2013年において「ひきこもりビジネス」のような、当事者による自助的な取り組みが新規に展開されたことから推察するに、現在の「ひきこもり」には、積極的に外部と自助的に関わろうと行動する「ひきこもり」と、対人関係を極力避けようとする「ひきこもり」の二通りが存在していることがわかる。インターネット上の動画配信サイトにおいても、「ひきこもり」を自称する動画配信者が、おもしろい生放送を、リスナー（視聴者）に提供することと引き換えに、自身の管理するインターネット上のコミュニティに勧誘する行為をする場合³⁷もあり、こちらは前者に該当する。特に、90年代以降のインターネットの台頭により、オンライン上のひきこもりコミュニティで当事者同士の情報共有が進行している。ただし、ひきこも

³⁴ 池上正樹(2013.5)『“履歴書の空白”が武器になる? 「ひきこもりビジネス」の胎動』ダイヤモンドオンライン< <http://diamond.jp/articles/-/36687>> (2013.12.21 取得)

³⁵ 池上正樹(2013.12.5)『ニート学部から“黒歴史学”“奇業学”が誕生!? 「NEET 株式会社×ひきこもり大学」の化学反応』ダイヤモンドオンライン< <http://diamond.jp/articles/-/45503>> (2013.12.21 取得)

³⁶ 池上正樹(2013.12.12)『引きこもり 44 歳息子を 70 歳父親が殺害 事件から垣間見えた「老老介護社会」の歪み』ダイヤモンドオンライン< <http://diamond.jp/articles/-/45866>> (2013.12.21 取得)

³⁷ 「ニコニコ動画 生放送」などでは日常的に行われている。

りの推計は2010年時点で69.7万人ともいわれ、上述の変遷に従うものは、多くの論者によってその存在を確認されてきた、ごく少数の「ひきこもり」のみである。残りの、実態のわからない多数派の「ひきこもり」に関しては、言及されないものがほとんどで、何らかのきっかけで、ある人物が結果的に「ひきこもりだった」と判明するケースが多い。また、「ひきこもり」の論じ方に、地域社会学的なアプローチが台頭してきたのは2003年頃であることがわかった。

第2章 ひきこもり現象と統計的分析

本章の目的は、統計学的観点から「ひきこもり」の傾向を言及することである。そのため、まず、「ひきこもり」と統計分析の関係について述べる。

2-2-1 「ひきこもり」と統計分析の関係

統計とは、現象を調査し、数量で把握することである。したがって、目的変数に対する説明変数の剪定の困難さから、ひきこもりは統計調査に向かないとよくいわれている。塩倉裕は実数把握には「全戸調査しかない」と述べる³⁸。全戸調査を実行した例が、後述の秋田県藤里町の取り組み³⁹であるが、3章で扱う、筆者がフィールドワーク調査した神奈川県横浜市の某区では、区政や人口の関係から、現状では、全戸調査は厳しい。また、「ひきこもり」の統計分析には暗数問題と定義問題が存在する。

暗数問題とは、この場合、実質的には「ひきこもり」であるにも関わらず、調査者との接触がないために統計データにカウントされず、「暗数」として残る当事者が多く含まれる状況を意味する。この問題は、地域全体を網羅的に調査する手法が発案されれば、ある程度は克服できる。また、定義問題とは、この場合、「ひきこもり」という対象の操作的な定義が曖昧であるため、異なる調査者による統計データの比較検討が困難である状況を意味する。この問題は、複数の「ひきこもり」の定義を検討し、それらを含むような包括的定義を提唱することにより克服できる。なお、ひきこもり現象の把握においては、暗数問題と定義問題は、双方ともに克服することが困難な問題である。定義を曖昧にすれば「ひきこもり」概念の外延が広がり、定義を厳密にすれば、「ひきこもり」の対象範囲が限定されてゆく。ここでは、英国の社会学者ジョエル・ベスト⁴⁰が「正への誤分類」（広すぎる定義）や「負の誤分類」（狭すぎる定義）と呼

³⁸塩倉裕(2000)『引きこもり』ビレッジセンター出版局:223頁

³⁹NHK(2013)『ひきこもりを地域の力に ～秋田・藤里町の挑戦～』

<http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3422_all.html>(2014.1.3 取得)

⁴⁰ Best, Joel, 2001, *Damned Lies and Statistics: Untangling Numbers from the Media*,

んだ事態が生じている。なお、ジョエルは、統計を見たとき「誰がこの統計を、なぜ、どのようにつくったのか」を問うべきであると主張し、「良い統計」とは「当て推量以上のもの」「妥当な定義」「妥当な計測方法」「良い標本」に基づくと述べている。

上記を踏まえた上で、工藤・川北(2008)は、以前までの『主要な「ひきこもり」調査』を次のようにまとめている⁴¹。

調査1

文献：伊藤順一郎ほか(2003)

実施期間：2002年1月～12月

「ひきこもり」の定義：1、自宅を中心とした生活をしている。2、就学・就労といった社会参加活動は、できないか、していない。3、以上の状態が六ヶ月以上続いている。ただし4、統合失調症などの精神病圏の疾患、または中程度以上の精神遅滞（IQ55-50）をもつものは除く。5、就学・就労はしていなくても、家族以外の他者（友人など）と親密な人間関係が維持されているものは除く

対象：全国の保健所・精神保健福祉センターへの来所相談（2回以上）をした者のうち社会的「ひきこもり」の基準に当てはまる事例3293件

知見など：男性76.4%、女性22.9%。平均年齢26.7歳。最初の問題発生は、平均20.4歳。経過年数は平均4.3年

調査2

文献：境ほか（2006）

実施期間：2005年9月～12月

「ひきこもり」の定義：（特に定義は設けず）

対象：全国ひきこもりKHJ親の会、43支部の会員、603名

知見など：平均29.5歳、世帯の平均年収は538万円（78%が日本平均を下回る）。父親の3割が現在無職

調査3

文献：小山ほか（2007）

実施期間：平成14（2002）～平成17（2005）年度

Politicians, and Activists, The University of California Press. (= 2002, 林大訳『統計はこうしてウソをつく・だまされないための統計学入門』白揚社:58-65 頁

⁴¹工藤宏司・川北稔(2008)前掲『「ひきこもり」と統計』:84 頁

「ひきこもり」の定義：仕事や学校にゆかず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6ヶ月以上続けて自宅にひきこもっている状態。時々買い物などで外出することもあるという場合は「ひきこもり」に含める

対象：岡山、鹿児島、長崎、栃木、山形、横浜において無作為抽出された4134世帯、および20～40歳代の1660人

知見など：19人に「ひきこもり」経験あり。生涯における経験率は1.14%。23世帯に現在「ひきこもり」状態の子どもが存在。世帯割合は0.56%で、全国では約26万世帯と推定

以下では、上記の表記形式を継承しつつ、本章の分析結果を報告する。

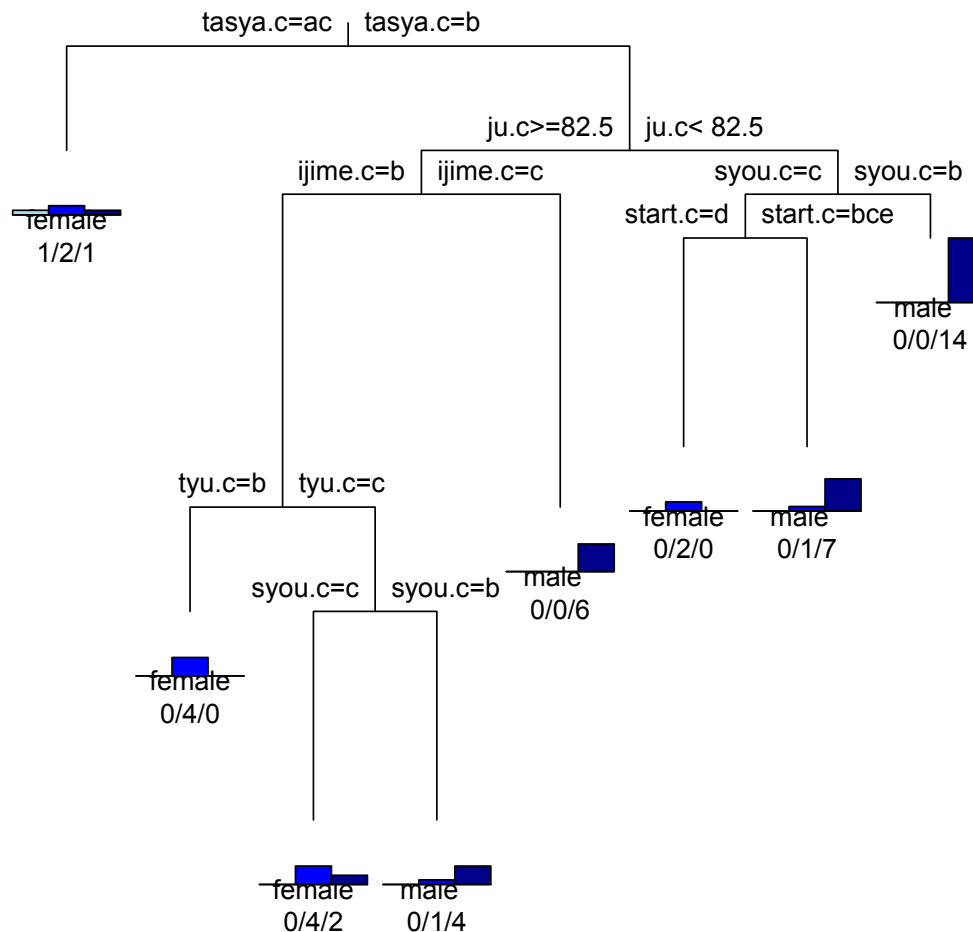
2-2-2 分析結果

本章の調査報告

対象：1999年～2006年にかけて複数者によって行われた「ひきこもり」当事者へのインタビュー調査における語りのうち、筆者の特定の観点や要因から「ひきこもり」一般を説明する形式をとっていない48件の半構造化インタビューデータ

「ひきこもり」の定義：（特に定義は設けず）

知見など：男性、71.8%、女性29.2%。平均年齢、約30歳。いじめが原因でひきこもりとなった者12.5%。対人関係が原因でひきこもりとなった者、39.6%。



平均年齢は調査2より0.5歳ほど高く、男女比は調査1と比較して、男性比率が4.6%ほど低く、女性比率が6.3%ほど高いことがわかった。知見の根拠に関して、分析に使用したR言語のプログラム実行結果を付録に付記した。

なお、データの各変数の意味は次の通りである。「性別(gend.c)」「インタビュー時の年齢(age.c)」「10歳時の年代(ju.c)」「ひきこもり開始時の属性(職業など)(start.c)」「小学校以前の対人の困難の有無(syou.c)」「中学校以降の対人の困難の有無(tyu.c)」「いじめの被害経験の有無(ijime.c)」「職場での対人の困難の有無(syoku.c)」「他者のコミュニティ形成(島宇宙)に対する言及の有無(shima.c)」「他者からの加害に対する恐れの有無(tasya.c)」「学業成績主義の有無(gaku.c)」。

2-2-3 2章のまとめ

本章の議論が示すのは、「科学的な」統計が、ひとびとの意図や目的によって、その内容が変化するという普遍的な事実である。統計では、ひきこもりの「実態」に近い数値は、暗数問題や定義問題の存在によって導き難い。統計にはそれぞれの固有の文脈が存しており、その解釈のためには、定義を操作化するだけでなく、調査が要請された背景などを含む「調査の実施」にまつわる諸状況と、ある数値が「実態」として提示される場合に、その数値を示す人々の実践および、それが置かれた社会的な議論の諸状況を明示することが重要である。本章の分析においては、機械言語による統計分析の手続きを踏むことで、いじめ・対人関係が原因でひきこもりとなった者の割合が数式的に算出された。

3章：ひきこもり支援の現状と展望

本章では、筆者のボランティアとしてのフィールドワーク経験に基づく知見をまとめる。

2-3-1 NPO法人「T会」の概要

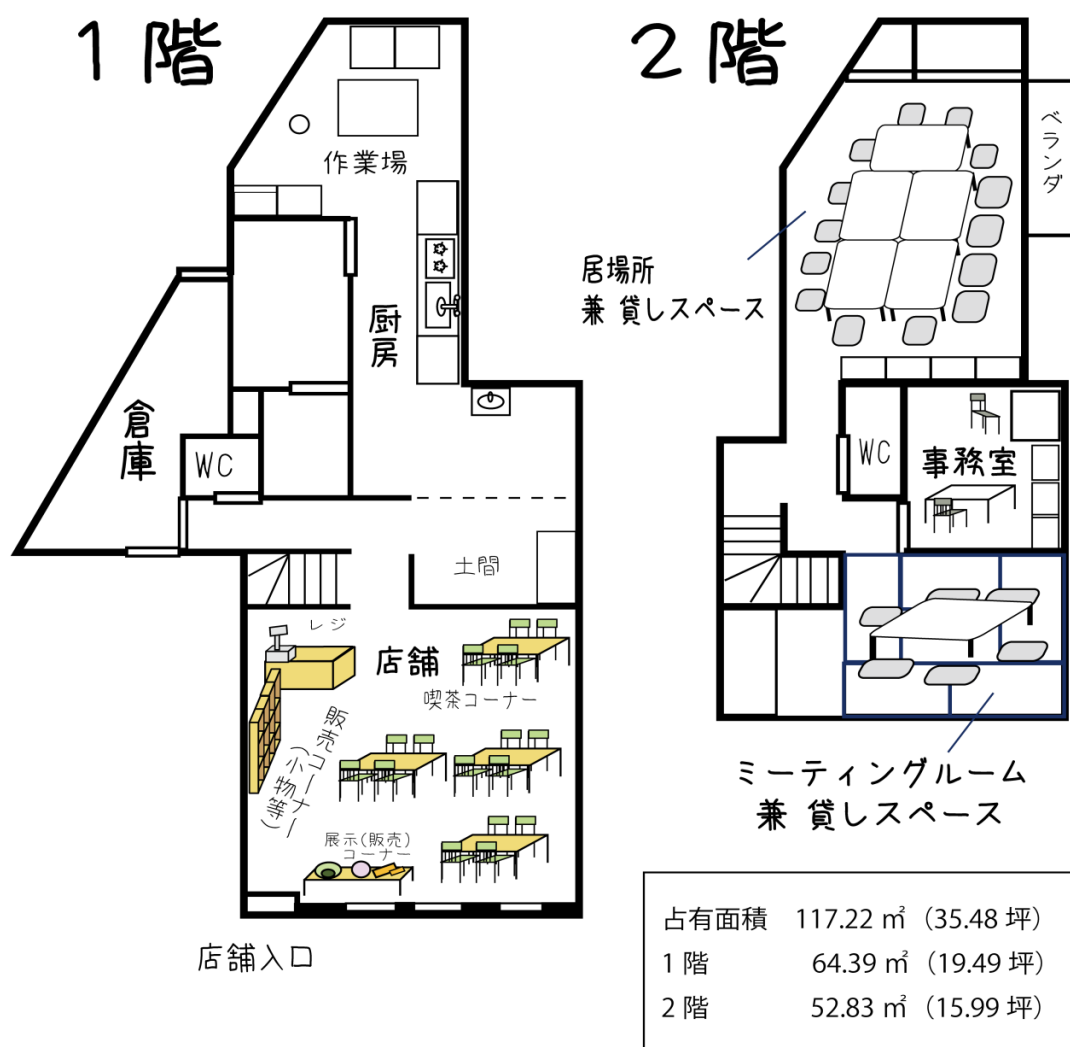
※T会の財務内容については、平成24年度の事業報告書の内容のうち、収支計算書、貸借対照表、財産目録を、付録として添付してあるので、適宜参考されたい⁴²。

「T会」は、8つの事業をもっており、管理する建物は、神奈川県横浜市内に二カ所ある。そのうちの一カ所は、横浜市が設けた四カ所の地域ユースプラザのうちの1つ（構造・規模：RC造6階建の3階部分 約延べ200平米）で、T会はその運営を、平成22年度から横浜市から受託している。なお、同ユースプラザの運営法人は、2013年11月22日には、横浜市の公募選定によって、ふたたびT会が、満期5カ年で選定された⁴³。地域ユースプラザでは、若者・その保護者等の支援にかかる公共事業を展開し、通年で、ひきこもり・不登校などの思春期・青年期問題の第一次的な総合相談や若者・保護者等や自立に向けた青少年の居場所のほか、地域で青少年の支援活動を行っているNPO法人等の団体や区との連携を図り、地域に密着した活動を行う施設の運営を行っている。従業員数は平成24年度で17名である。当事者の登録者数は平成23年度で340名、延べ利用者数は平成24年度で若者4213名、保護者411名である。

⁴² 「内閣府 NPO ホームページ」より検索 <https://www.npo-homepage.go.jp/>（2014.1.3 取得）

⁴³ 横浜市(2013)『横浜市青少年自立支援事業運営法人選定結果報告書』

もう一方の建物は、1階を、カフェスペース、厨房施設として利用し、2階を、居場所、ミーティングルーム、事務室として利用しており、居場所に関する事業、親の交流会事業、食事会事業、社会参加促進のための物品及び食品販売事業を展開している。従業員数は平成24年度で6名、当事者の延べ利用者数は平成24年度で若者288名、保護者167名である。なお、そのほかにT会は神奈川県内で、野外活動事業、ひきこもりへの相談等訪問事業、フリーマーケット事業を展開している。新設スペース図（レイアウトイメージ）は次のようになっている。



※貸しスペース：不特定多数を対象に料金を明示して常態的に貸し出しを募集・告知するのではなく、高齢者福祉や青少年等のNPOなどのグループや個人に対して、希望があれば個別に応じて貸し出しをする予定（月4程度）。

専属職員やボランティアの属性は、年齢が30代～70代で、NPO職員（市民活動支援・若者支援・青少年育成などの分野）、行政職員（福祉系）、カウンセラー：キャリアコンサルタント・産業カウンセラー・心理士・精神保健福祉等（フリー・一般企業・NPO・行政等）、元利用者などである。また、専従職員の給料は、常勤職員の年収が160万円～300万円程度、非常勤職員の時給が900円～1300円程度、ボランティア職員は1000円～3000円（1日分、交通費程度）である。

当事者がT会につながる経緯は、「まず保護者が講演会や親の会に参加し、やがて家庭内の親子関係に変化が現れ、本人が動きだし参加する場合」、「ユースプラザ経由から参加する場合」「若者自らHPをみて問い合わせをする場合」などである。また、参加にあたっては、見学・ヒアリングなどを初回に行い、週1回の居場所やスポーツ体験などからスタートすることが多い。ユースプラザ経由の場合は、カフェでの職場体験から参加することが多く、参加者は、年齢が20代～30代の者が多数を占める。

次に当事者のライフストーリーを一部紹介する。紹介にあたっては、『横浜市子ども・若者実態調査 ～支援機関におけるヒアリング調査結果について～』⁴⁴における12人のヒアリング結果を参照し、年齢と性別の組み合わせの異なる男女4名分を引用した。なお、当事者の写真の掲載は、対象特定への懸念から割愛した。

はじめに、ヒアリング対象者の全体の傾向を概観するが、対象者のうち、9人が不登校を、10人がひきこもりを経験しており、20代後半以降の者が多くを占めている（8人）、就労についての課題を抱える者も多くいる（8人）などの特徴が表れている。支援状況は全員（12人）が居場所を利用し、11人が個別相談を受けている。居場所以外にプログラムや体験活動を利用している者も11人であった。利用年数は、10人が3年以下で、これは、横浜市にある地域ユースプラザの開所からの期間が最長で5年であることも関係しているものと思われる。地域ユースプラザの場合、他機関からの紹介を受け、本人がある程度自発的に動いて利用につながっている事例が多く、居場所の利用を中心に、個別相談による課題の整理、プログラムや体験活動の積み重ねを通じて、就労等に向けた次のステップにつながっている。以下、個別のライフストーリーを紹介していく。

Lさん（20代後半、男性）は、外とのつながりを持てなくなった理由とその時に思っていたことを次のように述べている。

もともと対人関係は苦手で、高校は、通信制の高校に行き、週1回の通学とレポートを書いていたのですが、高校では、周りとの関わりはほとんど、ありませんでした。アルバイトもしましたが、対人関係でうまく行かず、辞めてしまい家にいることが多くなってしまいました。

⁴⁴ 横浜市（2013）『横浜市子ども・若者実態調査 ～支援機関におけるヒアリング調査結果について～』

それまでは、バイクが趣味でしたが、それもできなくなり、他に趣味もなく何もやりたいこともありませんでした。そして、8年前に祖母の介護が始まり、外とのつながりが薄くなりました。

高校一年の時は、関係をどう築いたら良いか考えてもうまくいかず、神経をすり減らし疲れていました。家ではゲームで気を紛らして何とか過ごしていました。でも、このままじゃいけないという気持ちとらはらにどうしたらよいか行動できず強いストレスを感じていました。2007年死ぬかと思うぐらいの呼吸困難と手足とお腹がしびれパニック発作を起こしました。それで、通院のため外出せざるを得なくなり、徐々に外出できるようになっていきました。

また、Lさんは、ユースプラザに来るようになったきっかけを次のように述べている。

2005年部屋にこもり始めたころから、母は青少年相談センターに相談に行ってくれていました。センターの人が2週に1回家に訪問してくれるようになり、そのうち母と一緒にセンターに通うようになり、その後一人で行けるようになりました。その年の冬には短期バイトが出来るまでになりました。センターの10代グループでは、皆の前で近況や一つのテーマについて話すことができました。最初はガチガチで酸欠状態でしたが、職員さんが助けてくれ通うのが楽しみになりました。2012年3月センターの10代グループを卒業し、通信制の大学へ入学しました。しかし、外に出る機会がないので自宅近くのユースプラザを紹介してもらいました。

最後に、Lさんは支援を受けた感想を、次のように述懐している。

ユースプラザの居場所は、何をしても良いというセンターよりさらに自由な空間で戸惑いでしたが、スタッフが話しかけてくれて楽しく過ごさせています。プログラムがある日は参加しやすいので、楽器を使う音楽プログラムやおやつ作りに出ています。今は週三日バイトをしていて、ちょうど良い疲れ方になっています。職場の雰囲気、仕事、人にも慣れて長く続けられそうな感じです。ユースプラザは、せつかく来たので細く長くゆるい感じで通って行こうかなと思っています。月1～2回相談していますが、バイト先で困ってもユースプラザがあるから大丈夫かなと思っています。皆さんの身近な所にも一人位は、大人し目の人がいると思うけど、そういう人に一度、声をかけてあげてください。きつとうれしいと感じると思います。

Tさん（20代前半、女性）は、外とのつながりを持てなくなった理由とその時に思っていたことを次のように述べている。

高校卒業後、就職した。菓子製造業で1年半働いた。会社の人員整理で3年前に解雇となった。新入社員は採用されていたのに、8月に解雇になったことがショックだった。先輩は新入社員の人には優しくしていたが、自分には冷たかった…その後、いきなりどうして解雇されて、どうしてよいか分からないまま過ごしていた。季節の変わり目で体調を崩し、昼夜逆転の生活になって、そのままひきこもってしまった。就職活動をしたと思った。いきなりの解雇にどうしてよいか分からない状態だった。求人広告を見て、アルバイトや就職を探してみたが、応募はしなかった。履歴書を書いてみたが、どうしても志望動機が書けず、それが辛かった。高校の時は、見本があってその通りに書けばよかったので、出来たが、自分一人では出来ないと思っていた。

また、Tさんは、ユースプラザに来るようになったきっかけを次のように述べている。

地元で通っていた教会で聖歌隊で歌を歌っていた。歌が大好きで、特にゴスペルが好きだった。たまたま、その教会の人が南部ユースプラザのことを紹介してくれたので、日中外に出ていなかったのを、居場所を利用してみようと思った。講座にゴスペル講座があったので、すぐに登録して参加した。それから、ボイストレーニングやボランティアもさせてもらって、定期的に来るようになった。

最後に、Tさんは支援を受けた感想を、次のように述懐している。

友達が出来た。生活リズムが改善された。ボランティアがある日は朝早く行かないといけないので、自分でお弁当を用意して持って行っている。高齢者施設のボランティアだが、とても楽しい。お陰で朝も自分で起きられるようになった。色んな体験もできて、自分のことを知る為の経験をさせてもらっている。これから、ファーム体験(横浜型若者自立塾JOB CAMP)にも参加したい。ボランティアで石巻にも行ってみたい。やりたいことが増えてきたし、具体的に自立の道も見えてきたので、今はもっと親の協力が欲しい。家族の協力がもらえないのが今の問題。母は、うつ病なので、殆ど家で寝ていることが多い。父は何も言わない。自分は早く自立したい。

Pさん(40代前半、男性)は、外とのつながりを持たなくなった理由とその時に思っていたことを次のように述べている。

17歳から19歳ごろから家にいるのが長くなった。体調も悪く昼夜逆転して不眠症になり昼夜が逆転してしまった。中高一貫校に中学受験をして進学し、高校はエスカレーター式に入っていた。だらだらとストレスが溜まっていった感じだった。大学進学も無理そうだし、流れにまかせてしまっている感じがして自分が無くなってしまふ感じだった。自分の人生ではないような感じだった。それまで、幼稚園で2回、小学校で2回と2、3年おきに転校していた。人一倍主体的に生きたいと思っていたのに、人とのつながりを持つことに満足を得られなかった。転校しても友達とはつながっていたかつし受験はどうでもよかった。家族は転勤族で次の場でつながりを作ればよいという考えで、あまり理解がなかった。自分の中で人とのつながりの一貫性がない感じがあり繋がっていない。今思うと自分以上に途切れている人もいて客観的にみられるようになって、今はその渦中にはないと思う。こうしたことを感じる人と感じない人がいると思うが自分は感じる側である。

高校をまだ辞めていない時はどうなってしまうのだろうとわけがわからず、将来に対しての漠然とした不安があった、学校からの連絡はあるし拘束されている感じはあり、高校3年の時に1度いったらアウェイな感じがあり戻るは無理だと確信した。学校も受験一色の空気になっていた。辞めてからは大分楽になった。その後、心臓の病気を小さい頃から抱えていたのでかかりつけの小児科医に紹介された精神医にもかかり「時間が解決するから無理しないように」といつてもらったその後、地域の自助グループに参加し、受験で挫折した自分とは違って躓いた人たちの話をきき、自分が経験していないことを再体験できたのがよかった。幾つかの自助グループに参加し、県外まで出かけるようになった。まるでその時が転校しているかのようで生活感がなく地に足のついた感じがなかった。

また、Pさんは、ユースプラザに来るようになったきっかけを次のように述べている。

現在通所している以外のユースプラザの開所の際に自助グループのつながりで手伝ったことがきっかけユースプラザのことを知った。精神科の主治医から現在の通所しているユースプラザも紹介をされて来所した。来所した当初は、随分綺麗なところだなという印象だった。自分が他の利用者よりも年齢が上だったが、関係なく受け入れてくれたのがうれしかった。雰囲気は穏やかでスタッフがプロだなと感じた。居場所スタッフと面接相談のスタッフが違うというのが今までの他の自助グループや居場所とは違ってよかった。それまで来所していた場所はみんな意見はいうが整理するのは自分という感じや居場所での人間関係が内へ内へという感じもあって外に開かれていない感じもあったがユースプラザの居場所は新鮮だった。

最後に、Pさんは支援を受けた感想を、次のように述懐している。

新しい体験をやらないと昔の整理がつかないと思う。今までやったことないこと、思いがけないことをユースプラザで体験していると思う。今社会体験で喫茶店での実習をしているが、いつもサプライズがあるように思う。同じ学校の出身の人や知り合いと同じ学校の出身の人がいたり地元ならではのサプライズがあると思う。それが人とのつながりで起きていると思う。ユースプラザを通所するようになってどんどん現実的な方向にゆり戻されている感じがする。わけのわからないストレスに押しつぶされなくて済む。その時々でやることがあるとひきこもらなくてよい。じょじょに社会に復帰できるように思う。朝起きて行く場所があり、身支度をして出かける場所があると、明確な目的があつてよいと思う。居場所にいると利用者同士の仲が良いなという気がする。みんな場の空気も読むし、優しく接してくれる。いつも新しい経験でちょっとずつ違う雰囲気だと思う。8月に参加した社会体験の海水浴は「新鮮な夏の思い出」だと思う。居場所では輪ができていて感じがし、以前来ていて今現在来ていない人はどうしているんだろうかと思う。偶然外で会うと元気なさそうにしていたりして声をかけるべきなのか考える。自立心が強い人ほど悩むと思うし個別面接をするのはその意味でもいいのではないかと思う。スタッフと連絡をとりあつていく意味だと思う。面接をしていると居場所にも来やすいと思うし、自分にとってはそれはラッキーだという感じがする。居場所の雰囲気は地域性でもあると思うが、和やかでみんなと年齢が違っていても緊張しないし世代の断絶がない。以前はもうちょっと無理をしている人がいたように思うが、今は和やかだし気軽にみんな話かけてくるのがいいと思うし、初対面の人とでもそんな様子だった。今現在は、だいぶ過去の躰きが整理できてきたと思うし、それなりに慎重に日課をこなしていると思う。社会体験で喫茶店での実習をしている。適度に人間関係もあり連絡をとりあつている人もいる。喫茶店での実習先の人間関係もよい。仕事も、みなその道のプロでポイントを押さえた仕事をしていると思う。仕事を見ているとオンとオフの切り替えをしているなと思うし、オフの方が元気な人もいる。そういう点は楽しいし今までは無かった体験で楽しんでもいいんだと思う。受験の時のような不安な感じもない。接客もするが現在はスタッフとのやりとりが多い。今までは客としての利用だったが商品を出すというのは考え抜かれた上でのことであつて、一つ一つの仕事が考えられていないとコミュニケーションにならないのでよく他のスタッフの動きを見ている。客に失礼のないように日常から考えていてその上でスタッフがどういう考えでやっているかが大切だと思う。自分が勉強させてもらっているという研修での緊張感と充実感があると思う。段階を踏んでやっているのがいいと思うし、お金をもらうことってどういうことなのか研修をしながら考えている。お金もらってしまうと逆に追い詰められてしまうし、今しかできないなと思う。研修される方が疲れるのではと思うし、お客さんも感じのいい人が多く救われていると思う。

Vさん(30代前半、女性)は、外とのつながりを持ってなくなった理由とその時に思っていたことを次のように述べている。

正社員として働いている頃に“うつ病”になった。鬱の治療を始め、休職、その後退職。5年間鬱の治療を続けていた。その間にアルバイトを転々として、負のスパイラルに入り、その後外出困難な状態に。最後は、3カ月ほど入院して、退院後も更に外出困難になって、そのまま一人暮らしのアパートでひきこもってしまった。自分を責めていた。当たり前のこと(部屋の掃除、外出など)さえできなくなって、何故だと自分を責めていた。親に迷惑かけたり、経済的負担をかけたりすることが申し訳なくて、非生産的な自分はだめだと思っていた。死にたいと言う気持ちより、こんなはずではなかった、自分が無駄な存在だと言う風に考えていた。

また、Vさんは、ユースプラザに来るようになったきっかけを次のように述べている。

2011年3月11日の震災以降、更に役立たずの自分が情けなく感じて、何か出来るようになりたいと思い始めた。ネットで調べて、JOB CAFEなどにも行って見たが自分とは合わないと思いつかなかった。でも、再就職がこれほど大変だと言うことに気づき、自分の今の立場が、ニート・ひきこもりなんだということに気づいた。それから、さらに“ニート・ひきこもり”で検索して、よこはまサポステを見つけて、電話をした所、面談は予約が取りづらく、今ひきこもって外に出るのも困難な状態なら、まずは、外に出る訓練でなんぷらに行ってみると良いと教えてもらって、なんぷらに電話して、インテーク面談をしてもらった。

最後に、Vさんは支援を受けた感想を、次のように述懐している。

講座はとても興味深かった。同じ悩みを抱えている人にも出会えたことで、自分だけが特殊ではないと思えた。ここでは受け入れてもらえたと感じた。出来ることを色々経験させてもらったことが成功体験となって、自信につながった。既に鬱の薬も飲んでいなかったもので、医師からも色々やってみなさいと言われていたので、無理せず自分のペースでやれたことも良かった。最初は、1ヶ月くらいですぐに元気になって仕事出来るようになりたい、ならないといけないと思っていたが、焦る気持ちを徐々になくして行ってもらえたことで、自分のペースでやりたいことを見つけられた。もう二度と、ひきこもりに戻りたくない。なんぷらに半年かけて、来続けたことが良かった。今は、石巻の復興支援に関われることで、自分にもできること

があることが自信になっている。同じ悩みを抱える人の助けになれば…みんなにも相談機関や支援につながってほしい。

以上より、当事者の「ひきこもり」の背景は、家族内部で発生した問題（祖母の介護など）によるもの、自身の病気によるもの、良好な人間関係形成の失敗および挫折が元となるもの、内向的な精神の自罰傾向によるもの、漠然とした不安によるもの、突然の解雇から途方に暮れていたことが原因のもの、あるいはそれらの複合によるものなど、多岐にわたることがわかった。

また、彼らが、地域ユースプラザへ通う動機および目的は、家族の勧め（動機）、外出の機会を増やすため（目的）、ユースプラザの開講講座に興味をもった（動機）、主治医の勧め（動機）、対人関係の機会をもつため（目的）、焦りから自発的に電話をした（動機）、など、個人の性向によって多様性がみられた。

支援の効果は、スタッフとの良好な関係によってアルバイトを行うことができるまでに回復した後、アルバイトとユースプラザへの通所を平行するもの、生活リズムが改善され朝に自力で起床できるようになり、さまざまな社会活動への参加意欲が芽生えたもの、年齢に引け目を感じることなく自分の居場所を獲得し、実習先で人間関係を構築したもの、社会体験によって自分のペースおよび自信をとりもどしたものなど、それぞれが有する文脈のなかで一定の状態の改善がみられたことから、有意義なものであったといえる。

2-3-2 カフェ事業でのボランティア体験

筆者はT会のカフェにて、ボランティアスタッフとして、商用弁当の製造・配達・販売を、正規スタッフの男性と共に行った。カフェの主要な事業である弁当配達は、火・水・木・金の曜日に行っており、就労支援としての性格と、カフェの収益捻出という目的があった。弁当の製造は、カフェのスタッフが午前9時頃から行う。配達用の弁当の数は、日によって異なるが、概ね20個弱で、ひきこもり当事者は具材の盛りつけなどの行程に携わっていた。外部から弁当配達の依頼がなされることもあり、過去最高の弁当の注文数は98個で、そのときの配達先は、地元の老人会であった。弁当のメニューは、その日にストックしてある食材の種類によって変化し、特に毎日決まった具材の弁当を作っているわけではなかった。11時半頃には配達先へ向かい、配達は、原則的には、某男性職員が毎回一人（たまに二人）で行っており、ひきこもり当事者が弁当の配達に携わることはあまりない。なぜなら、配達先の機関は、どこも自動車を必要とする距離にあり、自動車は概ね1台しかなく、自動車免許をもっているスタッフが限られているからだという。

弁当(1個400円)のほかに、焼きうどん(1パック150円)、フランクフルト(1本100円)とから揚げ棒(1本100円)を販売しており、総売り上げは、毎日1万円前後であった。弁当を買うのは、主に大学の職員で、フランクフルトとから揚げ棒は、生徒が主に買っていた。焼うどんの購入者については、目立った特徴はみられなかった。売上額は、次の日の弁当の準備のための資金源となるが、スタッフに事業としての展望を尋ねたところ、弁当配達は、自転車操業どころか赤字を出している状況だという。販売は、客足の遠のく13時前後に切り上げ、その後は、近くの業務用スーパーへ、食材や日用品の買い出しへ向かうため、11時半～1時までの90分で売る必要がある。また、売れ残った弁当はスタッフが買い取る。

上記から、このカフェの運営は、毎月の家賃、車のガソリン代、弁当販売の赤字、カフェへの来客の少なさ等、かなり厳しい状況にあるといえるだろう。

2-3-3 地域ユースプラザでのボランティア体験

地域ユースプラザは、カフェの最寄りのバス停からバスで20分程度の距離にある。ここでは、外部講師や、精神科医が定期的に招かれ、さまざまなワークショップや問診を行っている。専属職員と当事者は、それぞれの趣向に合わせて、その場に居合わせたメンバーどうしが自由に交流している。ここは、12時前後から18時までの運営であり、前半部は「音のワークショップ」などのイベント、後半部は「まったりの日」と呼ばれるフリータイムがある。筆者は、カフェ事業のボランティアが終わり次第、ユースプラザへ向かうことが通常で、そこへ到着するのは、だいたい後半部の時間であった。

フリースペース内には、当事者が持ち寄った豊富なテレビゲーム用品、ワークショップを通して作った折り紙作品などの造形品、クリスマスツリー、テーブルと椅子、畳と座布団、楽器、張り紙、自由に持ち帰りが可能な文集(当事者が原稿を書いたもの)などがあつた。グループでテレビゲームに興じる当事者、職員と談笑を行う当事者、人と関わることに消極的な当事者、ボランティアと将棋やトランプで盛り上がる当事者などがいた。ボランティアの役割はとくに決まっていなかった。

2013年12月25日には、地域ユースプラザでクリスマスパーティが開かれた。当初予定していた人数を超えて、30名の当事者と、数名の職員およびボランティアが集まった。会場の準備は職員とボランティアが行うが、プログラムには「参加者による出し物」の時間が設けられており、その準備は当事者が行った。今年の「参加者による出し物」では、音楽の演奏が行われた。携帯用ゲーム機に楽譜の打ち込みを行い自身の作曲した音楽を会場で披露した者、アコースティックギターでスペインの曲を演奏した者、当事者数名でバンドを組んで演奏した者、エレキギターの演奏と歌の演奏を同時に行ったものなど、さまざまな演奏がみられた。筆者は、トーン

チャイムを用いた、十数名による曲の演奏に参加した。パーティの最後に、その場のほとんどの人間がトランプを用いたゲームに参加し、もっとも優秀な成績をおさめた者に、キャラクターの描かれた手ぬぐいが贈呈された。パーティ終了後には、持参した科学装置を展示した女性が1名いた。パーティ終了後も18時まではフリースペースの運営が行われ、職員およびボランティアの後片付けを手伝う者や、当事者同士で語らう者、帰宅する者、ユースプラザ閉館後の飲み会の計画を立てる者がいた。

2-3-4 3章のまとめ

当事者のライフストーリーからは、個人の性向によって多様性がみられた。また、地域ユースプラザの支援の効果は、それぞれが有する文脈のなかで一定の状態の改善がみられたことから、有意義なものであったといえる。このことに関連して、斎藤環は次のように述べている。

デイケア活動とか溜まり場に参加するだけで、なぜひきこもりからの離脱が起こるかといえば、そこにコミュニケーションがあるからです。そこで始めて、周囲から受け入れられる。自分はまだ何者でもないけれど、とりあえず仲間からは承認され、受容されているというレベルの自信は回復される。(斎藤環, 2003, 『OK? ひきこもりOK !』マガジンハウス:176)

以上、T会において、地域ユースプラザは主として安心感を醸成し、同時にさまざまな人々と関わる機会を提供していたことがわかった。しかし、それと同時に、そこから「自立」へとつなげるための仕組みの必要性が示唆された。

第三部：結論

3-1 秋田県藤里町の取り組みとT会の取り組みの比較

2013年10月28日（月）のNHKの番組『クローズアップ現代』にて、秋田県藤里町のひきこもり実態調査と支援の様子が放送された。秋田県藤里町（人口：3800人、65歳以上は人口の4割）では7年前から、国内で初めての「ひきこもり」の全戸調査を実施している。結果、既存の国の調査による推計の5倍近い113名（働く世代の10人に1人）がひきこもりであることがわかった。高齢者の介護予防にあたっていた介護福祉士が、あるお年寄りから「家にひきこもっている若者がたくさんいるから、調べてほしい」との相談を受け、その後、藤里町社会福祉協議会が自

治会・民生委員・PTAなどの住民協力の元、調査に動いた結果であった。今では113名のうち50名以上が家を出て、36名が就職を果たした。

その後、一人のひきこもりの青年が社会福祉協議会の採用試験に現れた。事務局長の菊池まゆみは、このときの青年との面接を想起し、こう述べている。

「(……) 健康な体を持っていて、働く能力がないわけではなくて。そうすると、働く場を求めているのかな？その時、初めて分かった気がします。」

菊池のひきこもり支援策は、以前から行っていたカラオケ大会などの「楽しい居場所」を提供する方針から、失業者への支援事業を展開する方針へシフトした。菊池らの用意した「研修会場」には、以前の「楽しい居場所」とは対照的に、多くの当事者があつまった。

2010年には、菊池らは、町役場の協力を得て、ひきこもりのための就労支援施設を開設した。ここでは、当事者の「中間的就労（本格的に働くまでの準備期間の就労）」方式を採用した食事処が昼間に営業されており、当事者8名が時給110円～550円で起用されている。同施設では、当事者によるお年寄りへの買い物サポートも行っている。最近では、商店街もひきこもり支援の輪に加わり、当事者は「町にどんな仕事があるのか、写真店をはじめ、葬祭店や酒店などの店主から、仕事について」講義を受けることが可能となった。

この秋田県藤里町の一連の成功に関しては、玄田有史（東京大学教授）も指摘していることだが、全戸調査が行われたことの影響が大きい。これに対し、筆者の調査したT会の属する区は、25年12月31日時点で、世帯数129,114であり、総人口306,394であるから、現状の区政では、たとえ住民協力が得られたとしても、定期的な全戸調査はかなり厳しいだろう。

また、就労支援や地域社会的アプローチについては、横浜市で、すでに市内の各団体によって行われているが、財務的な困難を抱えている法人が少なくない。たとえば、T会は、平成24年度の事業報告書の冒頭部で次のように報告している。

地域における協力・連携や地域イベントにおいては、「若者支援」に協力したいという個人・団体・組織との関係性が基調にあり、そうした理解ある相手先へのお弁当配達などで、若者は日常的にあたたかい声かけや励ましの言葉などを頂けています。(……) 課題としては、移転当初から引き続き、カフェの運営基盤を安定化させることにあると考えています。お弁当などの注文もオープン当初から考えれば、1.5～2倍程度に増えています。しかし、それでもなお、固定費（家賃・水道光熱費など 人件費を除く）を確保するのが精一杯であり、保護者ボランティアや会員からの寄付などでご支援を頂いているのが、現実です。より一層の収益構造の検討、改善を行わなければならないと考えています。

さて、先の秋田県藤里町の事例は小規模自治体での成功例であるが、では、こうした政策を適用できない大規模自治体における、代替的な政策にはどのようなものが考えられるだろうか。

ここで、成功事例として、詳細は省くが、和歌山県田辺市の事例を紹介する⁴⁵。和歌山県田辺市は2013年12月時点で総人口79631、世帯数35,758の都市である。同市は、ひきこもり支援の先端的取り組みを行う都市として平成25年（2013）で12年目を迎え、全国でも異例の実績をあげている。

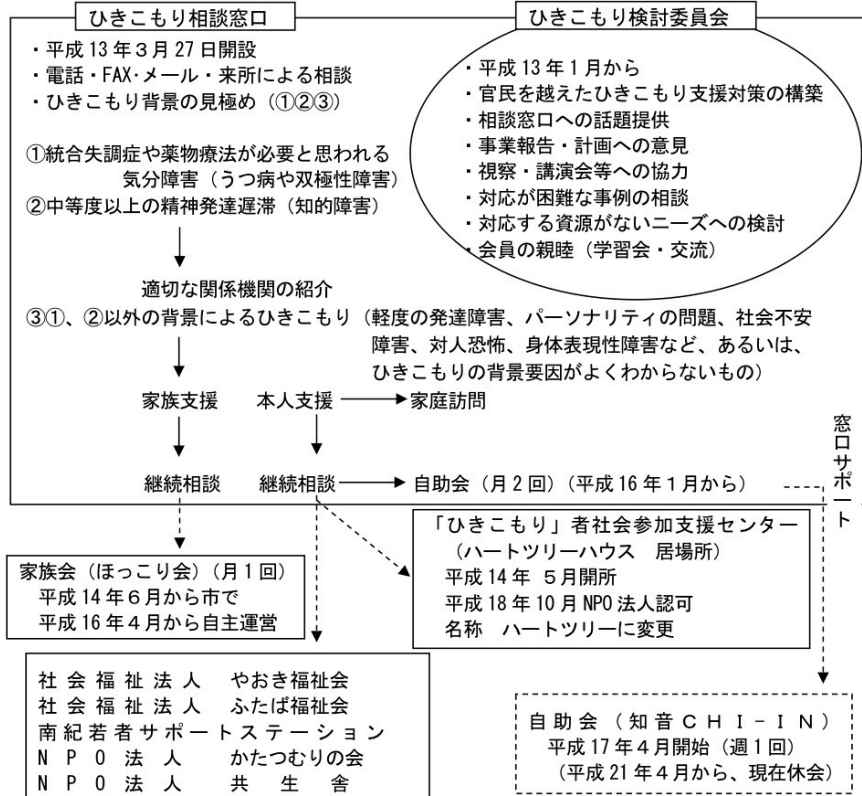
田辺市におけるひきこもり支援の内容は次の図に示される。

⁴⁵ 和歌山県田辺市(2013)『田辺市のひきこもり支援(窓口開設 12 年目の報告)』

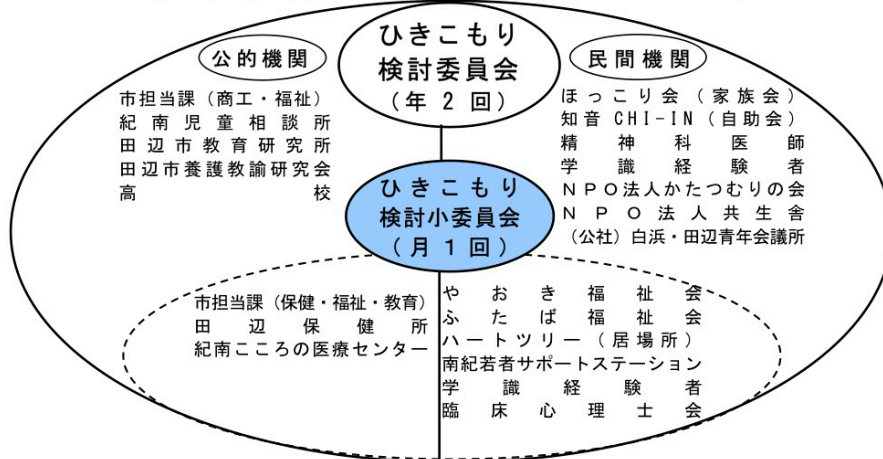
I-1. 田辺市ひきこもり支援について

田辺市における支援ネットワークとひきこもり支援

田辺市相談窓口支援の流れ（実践枠外は民間実施）



田辺市ひきこもり支援ネットワーク



ここに示される支援ネットワークには、その体制に官民調和の様相がみてとれる。また同市の支援実績と照合するならば、大規模自治体では、組織化された支援体制がしばしば有効であることが示唆されるだろう。

3-2 結論 「中間的就労」の可能性と問題点を巡って

本稿では、本論で、主にひきこもりの曖昧性を巡る議論を展開した。第一章より、「ひきこもり」の歴史的出自を巡る問題として、「ひきこもり」概念が広く普及したのは1990年代に入ってからであることがわかった。ただし、それ以前に「ひきこもり」問題が存在しなかったわけではない。なぜなら、不登校と呼ばれる若者は、しばしば、家にひきこもっていたからである。これは、前出の奥地圭子による指摘⁴⁶や、文部省の作成した報告書『登校拒否(不登校)問題について』(1992年)より明らかである。そして、2000年から、3つの事件を通してひきこもりへの社会的関心が高まったことは、石川良子ほか、多くの論者から指摘されている通りである。また、ひきこもりの論じ方は、相対的に、精神医学的なものから地域社会学的なものにシフトしつつある。2013年現在においては、さまざまな形態の自助グループが存在することが証明された。

第二章では、統計学的観点からひきこもりの性質を分析した。本章の議論が示すのは、統計は、その意図や目的によって内容が変化するため、調査が要請された背景などを含む「調査の実施」にまつわる諸状況と、ある数値が「実態」として提示される場合に、その数値を示す人々の実践および、それが置かれた社会的な議論の諸状況を明示することが重要であることが示唆された。本章の分析においては、機械言語による統計分析の手続きを踏むことで、いじめ・対人関係が原因でひきこもりとなった者の割合が数式的に算出された。

第三章からは、前項にもかかわるが、筆者の調査したT会は、ひきこもり当事者の支援にかんして一定の成果をあげていることがわかった。そして、二章で検討したように、ひきこもりの定義の曖昧性は、たしかに解消することが困難ではあるが、秋田県藤里町のように、雇用問題を行政主導で解決することにより、ひきこもり問題も同時に解消されていった事例も存在する。その背景には、地区ごとの行財政や人口問題がかかわっており、一概に原因を説明することはできないが、「雇用問題」と「地域社会」に関心を払うという発想はT会も取り入れており、これらは今後のひきこもり支援のキー概念となりうる。当事者のライフヒストリーからは、地域ユースプラザの効果について、「ひきこもり」の若者に安心感をもたらし、同時にさまざまな人々と関わる機会を提供していることが証明された。

46 再掲、奥地圭子『不登校という生き方 -教育の多様化と子どもの権利』129頁

さて、ここであらためて前出の「中間的就労」の可能性と問題点を検討したい。これについて、みずほ情報総研・社会政策コンサルティング部の福田志織は次のように述べている⁴⁷。

(……) 筆者は、調査の一環としていくつかの中間的就労事業所を訪問し、貧困や障がい、就労経験の不足等、様々なハンディキャップを持ちつつも、中間的就労によって自信をつけることで、少しずつ不安感を克服し一般就労に向かう方や、中間的就労の場を通じて地域社会とのつながりを保ち、いきいきと暮らす方々にお会いした。このような可能性を秘めた中間的就労は、しかしながら、困難を抱えた人を安価な労働力として利用し、労働市場全体を悪化させる、いわゆる「貧困ビジネス」になりかねないという危険性も持ち合わせている。

そして、福田は、こうした問題の発生の予防にかんして、次のように述べている。

これを防ぐためには、自治体等の第三者機関が、中間的就労を実施する事業所を厳格に審査する仕組みづくりが重要であろう。第三者機関は、利用者の状態や作業内容、指揮命令系統などを総合的に検討し、「雇用契約に基づいて行われるべき労働」であるか、「訓練的性格が強く雇用契約を締結することが難しい働き方」であるかを判断する。審査の結果、前者であると判断された場合には、事業所は必ず利用者と雇用契約を締結し、各種労働法制に則って雇用しなければならないし、これら適切な審査を経て、後者であると認定された場合でも、利用者の就労条件は、中間的就労の理念の下で適切に定められなければならない。例えば、労働保険に代わる補償や、工賃等の現金支給の方法および金額の目安等についてガイドラインが示されることが望まれる。また、中間的就労の定義は「支援付き就労」であり、その「支援」の部分についても、よりよい方法の検討や有効性の検証を行う必要がある。なお、「中間的就労」を設けることで、ハンディキャップを抱える人が従来以上に「一般就労」から排除されることがあってはならない。すべての人が、個人としての尊厳や人権を侵されることなく、いきいきと働くことのできる職場づくりへの努力は、どのような形態の仕事であっても、忘れられてはならないのである。

上記は、自治体等の第三者機関が、当事者の中間的就労の内容を、厳格な審査を通して「雇用契約に基づく働き方」か「雇用契約に基づかない働き方」かどうか分類・判断し、また、とくに後者と判断する場合、労働保険に代わる補償や、現金支給の方法、金額の目安等に関する

⁴⁷福田志織(2013)社会政策コンサルティング部『生活困窮者支援策として注目される「中間的就労」の可能性と課題』みずほ情報総研

<<http://www.mizuho-ir.co.jp/publication/column/2013/0507.html>>(2014.1.20 取得)

行政ガイドラインを予め示しておく必要性を示唆している。また、当事者の人権擁護の観点から、支援のシステムも十分に検討されたものでなくてはならないとも述べている。この支援について、「ひきこもり」の場合は、とくに、「当事者」と「支援の場」の接続が重要かつ困難であることは、藤里町の事例により明らかだが、この支援の問題について一つ、近年の情報技術の事情を参考に、インターネットによるソーシャル・サポートの導入に関する議論を提示する。

宮田加久子(2008)は、オンライン・サポートについて、次の8つの問題点を挙げている⁴⁸。

- 1、サポート提供者の信頼性、専門性、サポートを求めている人の状況について持っている知識を、サポート受領者は評価できない。
- 2、サポート受領者は、サポート提供者のサポートをしてあげたいという動機づけをコントロールできない。
- 3、サポート提供者はサポートを求めている人についてほとんど情報がないので、アドバイスの要求を誤解したり、会話の文脈を理解しにくかったり意思決定が難しく[Clark 1996]、結果としてサポートを求めている人々が適切なサポートを得られないという問題が起こりうる。
- 4、集団サイズが曖昧なため、サポートを求めるものの自分からは提供しないフリーライダーが生じやすい。
- 5、家族や親友のような強い紐帯とは異なり、インターネット上の弱い紐帯では特定の領域に限定したソーシャル・サポートを得られるようになるだけである。
- 6、オンライン・サポートグループは対面のグループよりも開放的な社会ネットワークであるため、時には当事者を装った人が興味本位で参加することも避けがたい。
- 7、いろいろな様式でのコミュニケーションが可能になってきたとはいえ、未だ文字によるコミュニケーションが中心であるため、自己開示には対面とは違った社会的スキルが必要になるかもしれない。
- 8、オンライン・サポートグループで得た情報やサポートについて、医者や福祉関係者などの日常生活空間でサポートを提供してくれている人々と話し合うことが困難な場合がある {Coulson & Knibb 2007}

これを踏まえた上で、宮田は、オフラインサポートとオンラインサポートとの統合にかんして、次のように結論している⁴⁹。

⁴⁸ 宮田加久子(2008)『インターネットによるソーシャル・サポート』宮田加久子・野沢慎司編『オンライン化する日常生活 サポートはどう変わるのか』文化書房博文社:41-43 頁

⁴⁹ 同書:44 頁

(……) 実際に、オンラインとオフラインのサポートが相互作用的に当事者の精神的健康に効果を及ぼしていることがわかっている。(……) さらに、インターネットを通じたソーシャル・サポートの受領は現実生活空間でのソーシャル・サポートの受領と提供を短期的にも長期的にも促進していた。(……) 現実生活空間でのサポートの交換を妨げることなく、オンライン・サポートグループでのコミュニケーションが増加すれば、人々は多様なサポート資源を得ることができ、オンラインとオフラインの両方のサポートの受領によって精神的健康がますます高まると考えられる[Miyata 2002]

本稿では、議論を提示するにとどまったが、「ひきこもり」の議論は、こうした社会心理学におけるメディア・コミュニケーション論的な検討にも開かれているといえる。また、和歌山県田辺市のひきこもり相談窓口では、メールによる相談も受け付けていることから、こうしたメディア・コミュニケーション論と地域社会学の緒論との連携の可能性が示唆されている。事実、小規模自治体である秋田県藤里町の事例では、社会福祉協議会のスタッフが徒歩で当事者の自宅へ赴き手紙をポストへ投函しているなど、インフラ整備の程度によって、オンライン・サポートが容易な都市とそうでない都市があることは明白だろう。

以上、本稿では小規模ながらひきこもりの言説史や全体像、当事者のアイデンティティやNPOの事業面などを総合的に扱い、結論では「中間的就労」の政策的課題を検討し、情報技術の可能性にかんして他領域との提携を示唆した。そのほか、本稿で扱うことのできなかつた検討も多々あるが、ここで、本稿の議論は結びとしたい。

謝辞

本稿の作成にあたり、多くの示唆をくださった小熊英二教授に、深く御礼申し上げます。また、研究会の皆様にも多くの示唆を頂いたことを、深く感謝いたします。神奈川県立青少年センター青少年サポート課の皆様、フィールドワーク先のT会の専属職員および当事者の皆様にも、お世話になりました。この場を借りて謝意を表したいと思います。

参考文献

- ・井出草平(2007)『ひきこもりの社会学』世界思想社
- ・石川良子(2007)『ひきこもりの<ゴール>』青弓社
- ・工藤宏司(2008)『ゆれ動く「ひきこもり」』『「ひきこもり」への社会的アプローチ』ミネル

ヴァ書房

- ・読売新聞(2001.2.1)「三条の女子殺人事件」
- ・読売新聞(2000.2.11)「監禁・殺人…異常事件続発の背景」
- ・毎日新聞(2000.2.12)「なぜ『若者』は凶行に走ったのか」
- ・産経新聞(2000.2.11)「社会と断絶『ひきこもり』昼夜逆転」
- ・斎藤環(2000)『精神科医から見たひきこもり』ロゼッタストーン
- ・藤田富士也(2000)『誤解だらけ!? [ひきこもり]の真実』週間SPA
- ・巨椋修(2010)『巨椋修(おぐらおさむ)の不登校・ひきこもり・ニートを考える FHN 放送局』< <http://d.hatena.ne.jp/fhn/20100810> > (2013/12/21 取得)
- (2003)< http://www5d.biglobe.ne.jp/~DD2/Rumor/column/hikiko_san.htm
- ・内閣府(2010)『若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)』
- ・斎藤環(2003a)『ひきこもり文化論』紀伊国屋書店
- ・斎藤環(2003b)『OK? ひきこもり OK !』マガジンハウス
- ・斎藤環(2012)『ひきこもりのライフプラン』岩波ブックレット
- ・寺戸順司(2010)『「ひきこもり」～「不可能世界」に生きる人たち』< <http://www.osaka-counseling.com/menu11/> >
- ・鈴木國文(2012)第107回日本精神神経学会学術総会『日本のひきこもり,ヨーロッパのひきこもり -イタリアとフランスの現状に触れて-』精神経誌
- ・工藤宏司・川北稔(2008)『「ひきこもり」と統計』『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』ミネルヴァ書房

ミネルヴァ書房

- ・萩野達史(2008a)『「ひきこもり」と対人関係 -友人をめぐる困難とその意味-』『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』ミネルヴァ書房
- ・萩野達史(2008b)『「ひきこもり」と精神医療-民間支援活動の示唆するもの-』『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』ミネルヴァ書房
- ・中村好孝・堀口佐知子(2008)『訪問・居場所・支援 -「ひきこもり」経験者への支援方法-』『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』ミネルヴァ書房
- ・NHK オンライン(2013)『ひきこもりを地域の力に ～秋田・藤里町の挑戦～』<http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3422_all.html>
- ・横浜市(2013)『横浜市子ども・若者実態調査 ～支援機関におけるヒアリング調査結果について～』
- ・内閣府『内閣府NPOホームページ』<https://www.npo-homepage.go.jp/>
- ・横浜市(2013)『横浜市青少年自立支援事業運営法人選定結果報告書』
- ・総務省(2010)『労働力調査』

- ・文部科学省『平成24年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』
- ・諏訪真美(2006)『今日の日本社会と「ひきこもり」現象』『医療福祉研究』第2号
- ・奥地圭子(2005)『不登校という生き方 -教育の多様化と子どもの権利』日本放送出版会
- ・工藤定次・斎藤環(2001)『激論!ひきこもり』ポット出版
- ・斎藤環・山下英三郎・藤井誠二(2001.9)『本当ですか!?“不登校の子はひきこもりする”』『月刊子ども論』9月号,クレヨンハウス
- ・斎藤環(1998)『社会的ひきこもり 終わらない思春期』PHP新書
- ・Stanley Cohen, 1972, *Folk Devils and Moral Panics: The Creation of Mods and Rockers*, Routledge
- ・厚生労働省(2003)『十代・二十代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン』
- ・小林美希(2008)「誰のための「再チャレンジ」だったのか -若者就労支援で儲けた人々」『世界』2008年10月号,岩波書店
- ・池上正樹(2013a)『“履歴書の空白”が武器になる?“ひきこもりビジネス”の胎動』ダイヤモンドオンライン<<http://diamond.jp/articles/-/36687>> (2013.12.21 取得)
- ・池上正樹(2013b)『ニート学部から“黒歴史学”“奇業学”が誕生!?“NEET株式会社×ひきこもり大学”の化学反応』ダイヤモンドオンライン<<http://diamond.jp/articles/-/45503>> (2013.12.21 取得)
- ・池上正樹(2013c)『引きこもり44歳息子を70歳父親が殺害 事件から垣間見えた「老老介護社会」の歪み』ダイヤモンドオンライン<<http://diamond.jp/articles/-/45866>>
- ・塩倉裕(2000)『引きこもり』ビレッジセンター出版局
- ・Best, Joel, 2001, *Damned Lies and Statistics: Untangling Numbers from the Media, Politicians, and Activists*, The University of California Press. (= 2002, 林大訳『統計はこうしてウソをつく-だまされないための統計学入門』白揚社)
- ・金明哲(2007)『Rによるデータサイエンス データ解析の基礎から最新手法まで』森北出版株式会社
- ・塩倉裕(1999)『引きこもる若者たち』ビレッジセンター出版局
- ・田辺裕取材・文・ブックマン社編(2000)『私がひきこもった理由』ブックマン社
- ・上山和樹(2001)『「ひきこもり」だった僕から』講談社
- ・勝山実(2001)『ひきこもりカレンダー』文春ネスコ
- ・諸星ノア(2003)『ひきこもりセキララ』草思社
- ・斎藤環監修, NHK「ひきこもりサポートキャンペーン」プロジェクト編(2004)『hikikomori@NHK ひきこもり』NHK出版

- ・ 和歌山県田辺市(2013)『田辺市のひきこもり支援(窓口開設 12 年目の報告)』
- ・ 宮田加久子(2008)『インターネットによるソーシャル・サポート』宮田加久子・野沢慎司編
(2008)『オンライン化する日常生活 サポートはどう変わるのか』文化書房博文社
- ・ 福田志織(2013)社会政策コンサルティング部『生活困窮者支援策として注目される「中間的
就労」の可能性と課題』みずほ情報総研
< <http://www.mizuho-ir.co.jp/publication/column/2013/0507.html> >

付録

付録A 2章の統計処理に用いた付表およびプログラム実行結果

	g	g	a	a				s	s	t	t								g	g		
	e	e	a	a				y	y	t	t								a	a		
	n	n	g	g	j	j	st	st	o	o	y	y	ij	ij	sy	sy	sh	sh	ta	ta	k	k
	d	d	e	e	u	u	ar	ar	u	u	u	u	im	im	ok	ok	im	im	sy	sy	u	u
i	t.	t.	.	.	.	,	e.	e.	u.	u.	a.	a.	a.	a.	.	.
d	n	c	n	c	n	c	n	c	n	c	n	c	n	c	n	c	n	c	n	c	n	c
1	1	m		2																		
		a		0																		
		l					da															
		e	3	1	3	0	3	i	1	y	1	y	2	n	1	y	1	y	2	n	1	y
2	1	m		3																		
		a		0																		
		l					da															
		e	4	e	2	5	3	i	1	y	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	2	n
3	1	m		3																		
		a		0																		
		l					da															
		e	4	e	3	0	3	i	2	n	1	y	2	n	3	o	2	n	1	y	1	y
4	1	m		3																		
		a		0																		
		l					ko															
		e	4	e	3	0	2	u	1	y	1	y	2	n	1	y	2	n	2	n	1	y

		e																					
5	2	f e m a l e	3	2 0	3	8 0	2	ko u	1	y	1	y	1	y	3	o	2	n	2	n	2	n	
6	1	m a l e	3	2 0	3	8 0	1	ty u	1	y	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	2	n	
7	1	m a l e	3	2 0	3	8 0	2	ko u	2	n	2	n	2	n	3	o	2	n	2	n	1	y	
8	2	f e m a l e	4	3 0	2	7 5	4	sy a	2	n	1	y	2	n	3	o	2	n	1	y	2	n	
9	1	m a l e	2	2 0	4	8 5	1	ty u	1	y	1	y	1	y	3	o	2	n	2	n	2	n	
1 0	2	f e m a l e	5	3 0	1	7 0	4	sy a	1	y	1	y	1	y	3	o	2	n	2	n	2	n	
1	1	m	3	2	4	8	2	ko	2	n	1	y	1	y	3	o	2	n	2	n	2	n	

1		a		0		5		u														
		f																				
1		e		2																		
2	2	e	2	e	4	5	3	da	1	y	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	2	n
		f																				
1		e		3																		
3	2	e	4	e	2	5	4	sy	1	y	1	y	2	n	1	y	2	n	2	n	2	n
		m																				
1		e		2																		
4	1	e	3	l	3	0	2	ko	2	n	1	y	1	y	3	o	2	n	2	n	2	n
		m																				
1		e		2																		
5	1	e	3	l	3	0	3	da	2	n	2	n	2	n	2	n	2	n	2	n	2	n
		m																				
1		e		2																		
6	1	e	2	e	4	5	1	ty	1	y	1	y	1	y	3	o	2	n	2	n	2	n
		m																				
1		e		2																		
7	1	e	3	l	3	0	2	ko	1	y	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	2	n
1	2	f	3	2	4	8	3	da	2	n	2	n	2	n	3	o	2	n	2	n	1	y

8		e		0		5		i															
		m		1																			
		a																					
		l		2																			
1		e		0		8		ko															
9	2	e	2	e	4	5	2	u	1	y	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	1	y	
		m		1																			
		a		0		9		da															
2		l		1		0		3	i	1	y	1	y	1	y	3	o	1	y	2	n	1	y
0	1	e	1	1	5	0	3	i	1	y	1	y	1	y	3	o	1	y	2	n	1	y	
		f																					
		e																					
		m		2																			
		a		0		9		da															
2		l		2		0		3	i	2	n	2	n	2	n	3	o	2	n	2	n	2	n
1	2	e	2	e	5	0	3	i	2	n	2	n	2	n	3	o	2	n	2	n	2	n	
		m		3																			
		a		0		7		ko															
2		l		3		2		2	u	1	y	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	2	n
2	1	e	5	1	2	5	2	u	1	y	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	2	n	
		f																					
		e																					
		m		3																			
		a		0		8		sy															
2		l		3		0		4	a	2	n	1	y	2	n	2	n	1	y	1	y	2	n
3	2	e	4	e	3	0	4	a	2	n	1	y	2	n	2	n	1	y	1	y	2	n	
2	1	m	4	3	3	8	3	da	2	n	2	n	2	n	3	o	2	n	2	n	2	n	

4		a		0		0		i														
		m		2																		
2		a		0		9		da														
5	1	e	3	1	5	0	3	i	2	n	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	1	y
		f																				
		e		1																		
2		a		0		9		ko														
6	2	e	1	1	6	5	2	u	1	y	1	y	2	n	3	o	1	y	2	n	2	n
		m		2																		
2		a		0		9		ko														
7	1	e	2	e	5	0	2	u	1	y	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	2	n
		m		2																		
2		a		0		8		da														
8	1	e	3	1	4	5	3	i	2	n	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	1	y
		m		3																		
2		a		0		8		da														
9	1	e	4	e	4	5	3	i	1	y	1	y	1	y	3	o	2	n	2	n	2	n
		m		3																		
3		a		0		8		ko														
0	1	e	4	e	3	0	2	u	2	n	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	1	y
		f		2																		
3		e		0		9		da														
1	2	m	3	1	5	0	3	i	1	y	1	y	2	n	1	y	2	n	2	n	2	n

		a																				
3	2	1	m		2																	
			a	0	8																	
			l																			
			e	3	1	4	5	1	u	2	n	1	y	1	y	3	o	2	n	2	n	2
3	3	1	m		3																	
			a	0	8																	
			l																			
			e	5	1	3	0	2	u	2	n	2	n	2	n	2	n	2	n	2	n	2
3	4	2	f																			
			e	2	e	5	0	2	u	2	n	2	n	2	n	3	o	2	n	2	n	1
3	5	1	m		3																	
			a	0	7																	
			l																			
			e	5	1	2	5	4	a	2	n	2	n	2	n	1	y	2	n	2	n	2
3	6	1	m		3																	
			a	0	8																	
			l																			
			e	5	1	3	0	2	u	2	n	2	n	1	y	3	o	1	y	2	n	1
3	7	1	m		2																	
			a	0	8																	
			l																			
			e	3	1	3	0	2	u	2	n	2	n	2	n	3	o	2	n	2	n	1
3	8	1	m		3																	
			a	0	8																	
			l																			
			e	5	1	3	0	3	i	1	y	1	y	1	y	1	y	1	y	2	n	2

		e																			
3		m																			
9	1	a	2	0	9		ty														
		e	2	e	5	0	1	u	1	y	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	2
4		m																			
0	1	a	2	0	9		ko														
		e	2	e	5	0	2	u	2	n	1	y	2	n	3	o	1	y	2	n	2
4		f																			
1	2	e	3	1	4	5	1	u	2	n	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	1
		m																			
4		a	2	0	8		ko														
2	1	e	3	1	4	5	2	u	2	n	1	y	2	n	3	o	2	n	2	n	2
4		m																			
3	1	a	3	0	7		sy														
		e	5	1	2	5	4	a	2	n	1	y	2	n	1	y	2	n	2	n	2
4		m																			
4	1	a	3	0	8		ko														
		e	4	e	3	0	2	u	2	n	2	n	2	n	3	o	2	n	2	n	2
4		m																			
5	1	a	3	0	7		ko														
		e	5	1	2	5	2	u	2	n	2	n	2	n	3	o	2	n	2	n	2
4	1	m	4	3	3	8	4	sy	2	n	2	n	2	n	1	y	2	n	2	n	2

6		a		0		0		a														
4		m		3																		
7	1	e	4	e	3	0	4	a	2	n	2	n	2	n	1	y	2	n	2	n	2	n
4		f																				
8	2	e	3	1	5	0	4	a	2	n	2	n	2	n	2	n	2	n	2	n	2	n

```
> leisure <- read.table("hikikomori.csv",header=T,sep=",")
> summary(leisure)
```

```

      id          gend.n          gend.c          age.n          age.c
Min.   : 1.00    Min.    :1.000           : 1    Min.    :1.000           : 1
1st Qu.:12.75    1st Qu. :1.000    female:14    1st Qu. :3.000    101: 2
Median :24.50    Median  :1.000    male  :34    Median  :3.000    20e: 9
Mean   :24.50    Mean    :1.292           Mean    :3.312    201:17
3rd Qu.:36.25    3rd Qu. :2.000           3rd Qu. :4.000    30e:12
Max.   :48.00    Max.    :2.000           Max.    :5.000    301: 8
NA's   : 1.00    NA's    :1.000           NA's    :1.000

      X10s.n          X10s.c          start.n          start.c          syou.n
Min.   :1.000    Min.    :70.0    Min.    :1.000           : 1    Min.    :1.000
1st Qu.:3.000    1st Qu. :80.0    1st Qu. :2.000    dai:14    1st Qu. :1.000
Median :3.000    Median  :80.0    Median  :2.000    kou:19    Median  :2.000
Mean   :3.479    Mean    :82.4    Mean    :2.542    sya: 9    Mean    :1.583
3rd Qu.:4.000    3rd Qu. :85.0    3rd Qu. :3.000    tyu: 6    3rd Qu. :2.000
Max.   :6.000    Max.    :95.0    Max.    :4.000           Max.    :2.000

```

```

NA's :1.000  NA's : 1.0  NA's :1.000          NA's :1.000
syou.c   tyu.n   tyu.c   ijime.n   ijime.c   syoku.n
: 1  Min.   :1.000   : 1  Min.   :1.000   : 1  Min.   :1.000
n:28  1st Qu.:1.000  n:15  1st Qu.:2.000  n:37  1st Qu.:2.000
y:20  Median :1.000  y:33  Median :2.000  y:11  Median :3.000
      Mean  :1.312          Mean  :1.771          Mean  :2.542
      3rd Qu.:2.000          3rd Qu.:2.000          3rd Qu.:3.000
      Max.  :2.000          Max.  :2.000          Max.  :3.000
      NA's  :1.000          NA's  :1.000          NA's  :1.000

syoku.c   shima.n   shima.c   tasya.n   tasya.c   gaku.n
: 1  Min.   :1.000   : 1  Min.   :1.000   : 1  Min.   :1.000
n: 4  1st Qu.:2.000  n:41  1st Qu.:2.000  n:45  1st Qu.:1.000
o:35  Median :2.000  y: 7  Median :2.000  y: 3  Median :2.000
y: 9  Mean   :1.854          Mean   :1.938          Mean   :1.708
      3rd Qu.:2.000          3rd Qu.:2.000          3rd Qu.:2.000
      Max.   :2.000          Max.   :2.000          Max.   :2.000
      NA's   :1.000          NA's   :1.000          NA's   :1.000

gaku.c
: 1
n:34
y:14

```

```

> leisure.tree <- rpart(gend.c ~ age.c + ju.c + start.c + syou.c + tyu.c + ijime.c + syoku.c
+ shima.c + tasya.c + gaku.c, data = leisure, parms = list(split='information'),
method="class")

```

```

> summary(leisure.tree)

```

```

Call:

```

```

rpart(formula = gend.c ~ age.c + ju.c + start.c + syou.c + tyu.c +
      ijime.c + syoku.c + shima.c + tasya.c + gaku.c, data = leisure,
      method = "class", parms = list(split = "information"))

```

```

n= 49

```

```

CP nsplit rel error  xerror      xstd

```

```

1 0.08888889      0 1.0000000 1.000000 0.2150779
2 0.06666667      5 0.5333333 1.466667 0.2321154
3 0.01000000      7 0.4000000 1.333333 0.2293637

```

Node number 1: 49 observations, complexity param=0.08888889

predicted class=male expected loss=0.3061224

class counts: 1 14 34

probabilities: 0.020 0.286 0.694

left son=2 (4 obs) right son=3 (45 obs)

Primary splits:

tasya.c splits as LRL, improve=3.601068, (0 missing)

start.c splits as LRLRL, improve=3.354689, (0 missing)

age.c splits as LLRRRR, improve=3.171884, (0 missing)

syoku.c splits as LLRR, improve=2.799618, (0 missing)

ijime.c splits as LRL, improve=1.885383, (0 missing)

Node number 2: 4 observations

predicted class=female expected loss=0.5

class counts: 1 2 1

probabilities: 0.250 0.500 0.250

Node number 3: 45 observations, complexity param=0.08888889

predicted class=male expected loss=0.2666667

class counts: 0 12 33

probabilities: 0.000 0.267 0.733

left son=6 (21 obs) right son=7 (24 obs)

Primary splits:

ju.c < 82.5 to the right, improve=2.7126290, (0 missing)

age.c splits as -LLRR, improve=1.6894200, (0 missing)

syou.c splits as -RL, improve=0.6371893, (0 missing)

start.c splits as -LRLR, improve=0.6371893, (0 missing)

ijime.c splits as -LR, improve=0.2835353, (0 missing)

Node number 6: 21 observations, complexity param=0.08888889

predicted class=male expected loss=0.4285714

class counts: 0 9 12

probabilities: 0.000 0.429 0.571

left son=12 (15 obs) right son=13 (6 obs)

Primary splits:

ijime.c splits as -LR, improve=4.2458950, (0 missing)

tyu.c splits as -LR, improve=4.0425130, (0 missing)

syoku.c splits as -LRL, improve=1.8369800, (0 missing)

start.c splits as -LLLR, improve=0.7487032, (0 missing)

gaku.c splits as -RL, improve=0.4361216, (0 missing)

Node number 7: 24 observations, complexity param=0.06666667

predicted class=male expected loss=0.125

class counts: 0 3 21

probabilities: 0.000 0.125 0.875

left son=14 (10 obs) right son=15 (14 obs)

Primary splits:

syou.c splits as -RL, improve=2.933841, (0 missing)

tyu.c splits as -RL, improve=2.019830, (0 missing)

ijime.c splits as -RL, improve=1.759777, (0 missing)

start.c splits as -RRLR, improve=1.361334, (0 missing)

ju.c < 77.5 to the left, improve=1.051389, (0 missing)

Node number 12: 15 observations, complexity param=0.08888889

predicted class=female expected loss=0.4

class counts: 0 9 6

probabilities: 0.000 0.600 0.400

left son=24 (4 obs) right son=25 (11 obs)

Primary splits:

tyu.c splits as -LR, improve=2.51607300, (0 missing)

syoku.c splits as -LRL, improve=1.12276100, (0 missing)

start.c splits as -LRLR, improve=0.36211040, (0 missing)

ju.c < 87.5 to the left, improve=0.09343581, (0 missing)
syou.c splits as -RL, improve=0.09343581, (0 missing)

Node number 13: 6 observations

predicted class=male expected loss=0
class counts: 0 0 6
probabilities: 0.000 0.000 1.000

Node number 14: 10 observations, complexity param=0.06666667

predicted class=male expected loss=0.3
class counts: 0 3 7
probabilities: 0.000 0.300 0.700
left son=28 (2 obs) right son=29 (8 obs)

Primary splits:

start.c splits as -RRLR, improve=3.0944820, (0 missing)
ijime.c splits as -RL, improve=1.3282860, (0 missing)
shima.c splits as -LR, improve=0.8161371, (0 missing)
gaku.c splits as -LR, improve=0.8161371, (0 missing)
ju.c < 77.5 to the left, improve=0.6326870, (0 missing)

Node number 15: 14 observations

predicted class=male expected loss=0
class counts: 0 0 14
probabilities: 0.000 0.000 1.000

Node number 24: 4 observations

predicted class=female expected loss=0
class counts: 0 4 0
probabilities: 0.000 1.000 0.000

Node number 25: 11 observations, complexity param=0.08888889

predicted class=male expected loss=0.4545455
class counts: 0 5 6

```
probabilities: 0.000 0.455 0.545
left son=50 (6 obs) right son=51 (5 obs)
Primary splits:
  syou.c splits as -RL,      improve=1.25800400, (0 missing)
  ju.c   < 87.5 to the left, improve=0.39495830, (0 missing)
  age.c  splits as -LLR--,   improve=0.05516020, (0 missing)
  start.c splits as -LR-L,   improve=0.05516020, (0 missing)
  gaku.c splits as -RL,      improve=0.02615617, (0 missing)
```

```
Node number 28: 2 observations
predicted class=female expected loss=0
class counts:    0    2    0
probabilities: 0.000 1.000 0.000
```

```
Node number 29: 8 observations
predicted class=male   expected loss=0.125
class counts:    0    1    7
probabilities: 0.000 0.125 0.875
```

```
Node number 50: 6 observations
predicted class=female expected loss=0.3333333
class counts:    0    4    2
probabilities: 0.000 0.667 0.333
```

```
Node number 51: 5 observations
predicted class=male   expected loss=0.2
class counts:    0    1    4
probabilities: 0.000 0.200 0.800
```

```
> plot(leisure.tree)
> text(leisure.tree, use.=T)
```

付録B T会の収支計算書、貸借対照表、財産目録（平成24年度）

平成24年度 特定非営利活動に係る事業会計 収支計算書
 平成24年4月1日から平成25年3月31日まで
 特定非営利活動法人

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I 収入の部				
1 会費・入金会収入				
㊦ 年会費		140,000	△ 140,000	
2 事業収入				
㊦ 居場所事業に関する事業収入		53,700	△ 53,700	
㊧ 親の交流会事業に関する事業収入		322,460	△ 322,460	
㊨ 野外活動事業に関する事業収入		0	0	
㊩ 食事会事業に関する事業収入		29,100	△ 29,100	
㊪ ひきこもりへの相談等訪問事業に関する事業収入		67,200	△ 67,200	
㊫ 社会参加促進のための物品及び食品販売事業に関する事業		3,730,836	△ 3,730,836	
㊬ 若者・その保護者等にかかる公共事業収入		25,418,610	△ 25,418,610	
㊭ フリーマーケット		76,020	△ 76,020	
3 寄附金		1,585,840	△ 1,585,840	
4 助成金		800,000	△ 800,000	
5 預金利息		653	△ 653	
6 雑収入		510	△ 510	
当期収入合計 (A)	0	32,224,929	△ 32,224,929	
前期繰越収支差額	0	949,180	△ 949,180	
収入合計 (B)	0	33,174,109	△ 33,174,109	
II 支出の部				
1 事業費				
㊦ 居場所事業に関する事業費		162,212	△ 162,212	
㊧ 親の交流会事業に関する事業費		974,056	△ 974,056	
㊨ 野外活動事業に関する事業費		0	0	
㊩ 食事会事業に関する事業費		87,902	△ 87,902	
㊪ ひきこもりへの相談等訪問事業に関する事業費		202,991	△ 202,991	
㊫ 社会参加促進のための物品及び食品販売事業に関する事業		4,962,301	△ 4,962,301	
㊬ 若者・その保護者等にかかる公共事業		25,434,765	△ 25,434,765	
㊭ フリーマーケット		0	0	
2 管理費				
管理・事務経費		293,239	△ 293,239	
租税公課		0	0	
法人税等充当金		120,000	△ 120,000	
			0	
			0	
当期支出合計 (C)	0	32,237,466	△ 32,237,466	
当期収支差額 (A) - (C)	0	△ 12,537	12,537	
次期繰越収支差額 (B) - (C)	0	936,643	△ 936,643	

平成24年度 特定非営利活動に係る事業会計 貸借対照表
 平成25年3月31日現在
 特定非営利活動法人 [REDACTED]

(単位：円)

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金	95,258	
普通預金	2,117,074	
前払費用	234,740	
立替金	630,137	
流動資産合計		3,077,209
2 投資その他の資産		
保証金	1,500,000	
投資その他の資産合計		1,500,000
資産合計		4,577,209
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金	2,186,837	
未払法人税等	120,000	
預り金	133,729	
流動負債合計		2,440,566
2 固定負債		
長期借入金	1,200,000	
固定負債合計		1,200,000
負債合計		3,640,566
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産		949,180
当期正味財産増加額	Δ	12,537
正味財産合計		936,643
負債及び正味財産合計		4,577,209

平成24年度 特定非営利活動に係る事業会計 財産目録
 平成25年3月31日現在
 特定非営利活動法人

(単位：円)

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金		
現金手許有高	95,258	
普通預金		
三井住友銀行横浜駅前支店	471,752	
三井住友銀行横浜駅前支店	0	
三井住友銀行センター南支店	1,432,126	
ゆうちょ銀行	143,050	
ゆうちょ銀行	70,146	
前払費用	234,740	
立替金	630,137	
流動資産合計		3,077,209
2 投資その他資産		
保証金	1,500,000	
投資その他資産合計		1,500,000
資産合計		4,577,209
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金	2,186,837	
未払法人税等	120,000	
預り金	133,729	
流動負債合計		2,440,566
2 固定負債		
長期借入金	1,200,000	
固定負債合計		1,200,000
負債合計		3,640,566
正味財産		936,643